

京都部落問題 研究資料センター通信

第17号

発行日 2009年10月25日 (年4回発行) 編集・発行 京都部落問題研究資料センター

本
の
紹
介

黒川みどり編著

『部落史研究からの発信』第2巻 近代編

秋定嘉和

(京都部落問題研究資料センター所長)

本書は部落解放・人権研究所創立四〇周年の記念事業として、近代・近代・現代編の三冊が編まれたうちの二冊である。当近代編は第二巻にあたり、本年六月に刊行された。黒川みどりの「総論

近代部落史研究の現在」をはじめとして全一九人が、各自十数頁の論文と注記を付してまとめたものである。また、本書はそのスタイルからみても内容からみても、一九八九年刊の小林茂・秋定嘉和編『部落史研究ハンドブック』(以下「ハンドブック」と略)を引き継いだものといえる。従って本書を担当した執筆者も『ハンドブック』以降の約二〇年分の研究業績を要領よくコンパクトにまとめ、紹介したものとなっている。

本書の特徴は、一、部落史だけでなく多様な被差別民の分野にも言及する。二、関連する他分野にもつなげて発信する。三、これらの分野の歴史研究にも手がかりを提供したい、とある(「刊行にあたって」より)。その他に、できるだけ党派的、イデオロギー的な判断を

避けていることに留意していることにある。紙幅の都合もあり、順次要約的に述べていきたい。

一 黒川の総論は、これまで重視されてきた社会主義からする価値観や戦争責任、運動家の評価についてそれぞれ分析は現在の研究者にきびしく問われているとする。さらには、差別の複合性をいとうとさき単なる被差別部落民だけでなくその関連性を女性、労働者、農民、在日朝鮮人、娼婦、病者、障害者、貧民、坑夫、囚人、引いてはこのような人々をくくっている民族・人種差別の問題にまで枠をひろげて言及する必要性を提示している。そういった意味で、『ハンドブック』まで続いていた部落史研究の「枠組み」は「解体に瀕する」にいたったといえる。それは「国民国家」(近代のなかで行われた国家と国民の統合によって生まれた)と、社会的「周縁」におかれた人々の登場をみる事態となつたと述べている。

二 各論では、まず最初に上杉聰が「明治維新と賤民廃止令」で研究史整理とその成果について述べている。上杉は「廃止令」以降、地租改正により進んだ土地所有化、商品化が身分解体を決定たらしめたことを強調している。また戸籍法研究に関して言及、戸籍改変が近代化と連なることを指摘した他の研究者の成果も紹介している。今後の論争点となるであろう「廃止令」の反対一揆研究について、一揆を民衆の負の遺産とする研究に対して内部に差別解消へ向かう流れもあることを指摘している。

三 石居人也「自由民権運動と部落」によれば、民権運動研究と部落史研究が交叉したのは一九八〇年代の研究で、それ以降の研究は少なく、石居の作成した「注記」からみても概論的なものが多く、ここ二〇年は研究の深まりがみられていないといえる。

四 ひろたまさき「近代天皇制と差別」は天皇制が差別の源泉であるとする古典的理解について『ハンドブック』以降の研究が十分であったと反省している。しかし、部落史研究と直接つながりはないが、『岩波講座 天皇と王権を考える』などの諸論(米谷匡史・安丸良夫)を紹介、部落史研究者の

参加を求めている。

ひろたによれば今や、差別史は各分野で豊穰期を迎え、方法論、問題意識も活気ある時を迎えているという。

天皇制と関連して部落史から発言した人々は、黒川、岩井忠熊、鈴木正幸、鈴木良、竹永三男、渡部徹、秋定、朝治武、藤野豊、キム・チョンミ、上杉がとりあげられた。他分野の女性、民衆史の成果も関連付けて論及され、さらに植民地、欧米帝国、旧社会主義の動向にまで述べられている。幅広い論及は黒川論稿と双璧をなすものとなっている。

五 今西一「国民国家論と部落問題」は、国民国家論者の立場からすでに全国部落史研究交流会での今西報告（『部落史研究』³、一九九九年七月）がある。今回の今西論稿は戦後の歴史学の大家久雄、丸山真男、色川大吉、安丸、網野善彦、阿部謹也、西川長夫に至る展開からはじめられる。世界的な内容を整理するには筆者（秋定）の研究不足で六〇頁から六五頁に至る箇所は読者の検討をお願いしたい。六六頁以降の部落史研究との関連については、部落差別が前近代社会の遺制であったという戦前の喜田貞吉、高橋貞樹、戦後の井上清、林屋辰三郎、奈良本辰也、藤谷俊

雄、馬原鉄男、鈴木良の議論は、ヨーロッパの近代革命の研究が進む中で、日本の明治維新こそがフランス革命よりも徹底した近代革命である」とする「実証研究」でやぶれたという。

今西の国民国家論からする部落史への接近は一九九八年の「交流会」前後であるが、マイノリティや女性史にまでひろげて論じている。今西は部落史の中で関口寛、友常勉、安保則夫、布川弘、原田敬一、佐賀朝、小林文広、廣岡浄進などの成果をあげ、既存の実証主義の「認識論的保守主義（安丸）」への批判をもとめている。これまでの歴史学のもつ認識のあり方の変更を求めており、この方向へと部落史研究者も歩むことを要請している。

六 吉村智博「部落産業と労働」は、部落産業と労働力の関連を問う、福原宏幸の西浜モデルにした分析に注目している。原田も西浜の親方層に注目、朝鮮人の労働力にも目をむけている。河明生は京阪神一帯の在日の労働力と部落民の労働力との競合を、布川は新川の労働分析（屠場）を行い、「差別観念の淵源」となっているとした。蓮城寺秋幸によれば、部落と周辺地域の混合のめばえは戦時下にみられるとしている。部落の生業と

産業の関連については前川修、臼井寿光、鈴木栄樹、駒井忠之、石垣進らの九〇年代の業績も紹介されている。

他に東京での藤沢靖介、友常の成果、名望家新田長次郎の分析は吉村によつてなされている。皮革の朝鮮との関係も今井ひろ子、滝尾英二、国内の牛馬流通網の研究も中里亜夫の重厚な業績は見逃せない。

屠場史研究ものびしようじ、三宅都子、本郷浩二、藤井寿一、横山百合子らの研究進展が述べられている。地主と小作料をめぐる研究では、「差別小作料」について竹永三男は、これまでの研究で肯定的に判断されていた意見に留保する見解を示した。

吉村は、最後に部落の労働史や共同体論と社会福祉・労資関係史研究との接点を求めている。

七 吉田栄治郎「地域社会と部落」では、これまでの井上清の部落史（階級史観）から共同体重視への視点転換を求めている。

この視点から神社祭礼との関連が問われ、発表された業績は、福島正夫、石田貞、井ヶ田良治、斎藤洋一、鈴木良、平井清隆、浅野安隆である。しかし、この分野の研究進展は少ないという。小学校の一般校と部落校との分離、合併

による紛糾も安川寿之輔、青木孝寿、安達五男らの研究事例があり、中部や近畿地方での事件が注目された。

一八八〇年代の町村合併進行のなか滋賀、奈良の分村、合村をめぐる騒動が紹介されている。平井、和田恵治、吉村らの成果があった。合併は本村と部落の関係を問うことになり、その不平等な扱いを身分差別の残存とし天皇制の地域支配の貫徹と鈴木良は説いた。その地域支配の中核に地主をおいたことで論争が始まり、奥村弘、吉田、井岡康時、奥本武裕らの疑問提出が今日まで続いている。

ところで、吉田は奈良の豊富な行政資料を背景に、新聞、雑誌資料の利用よりさらに部落内部の村資料の発掘と利用を提案している。

八 小林文広「都市下層社会と差別」は都市下層に注目して東京や京都の研究の動向を述べている。対象とした東京（江戸）の貧困層研究は北原系子、松本四郎、吉田伸之の業績があるが近代の都市下層民の研究ズレを「非人」を例として指摘している。小林は「解放令」以降の共同体や社会生活（習俗、縁故、地縁、教育）の変化を天皇制国家のなかで位置付けることを求めている。国民国家は差別 被差別市民を内包する

ものだが、社会の流動と滞留のダイナミズムを指摘する。そして馬原的封建遺制論ではこの変化を捉えることはできないことを述べている。これに賛同する研究者として中島久人、友常、阿部安成、黒川、吉村、重松正史、原田、布川らがあり、農村から都市部落へと研究関心は移っていったとする。

九 本論稿は他の人権史の分野の紹介である。小川正人「近代アイヌ史」の登場である。そこには一九四〇年代の代表作である高倉新一郎『アイヌ政策史』、『新撰北海道史』などの業績の継承と再検討を述べている。そして、その後海保嶺夫、榎森進など論作を述べ、「アイヌ新法」施行による住民重視による研究変化を菊池勇夫、海保らの各論的研究の深化を述べている。その他、教育史での小川竹ヶ原幸朗の仕事が、解放運動史では「解平社」を扱った内容の紹介があり、人類学からの発言（坂野徹、木名瀬高嗣）も登場している。中心的団体のアイヌ協会、ウタリ協会の存在と資料発掘、活動紹介がなされ、本稿執筆者小川の論文注記はありがたい。

一〇 伊藤悦子は、「教育と部落差別」の研究はマルクス史学の影響からはじまったとしている。

戦後初期の盛田嘉徳、小川太郎ら六〇年代からの安川寿之輔、八〇年代の松浦勉らがリードしたことを述べている。

ついで、部落学校の存在を安川寿之輔から安達がうけつぎ兵庫を中心に、奈良を安川重行が、福岡は森山沾一が論作と資料蒐集を行った。他に京都を事例に灘本昌久が大坂は吉村が、兵庫は吉岡保が、奈良は教育貧困化を奥田喜則が述べている。なお、伊藤は部落学校、部落の社会変化、「国民国家論」との関連など述べる必要性を指摘している。

伊藤は都市の貧民学校の変化を追っている。一方、部落の学校が直面した問題を多くの研究者が述べている。東京での松浦利貞、京都の白石、中島智枝子、大阪での赤塚康雄、八箇亮仁、布引敏雄などがおり、他の教育史より質量と厚い。能川泰治は貧民学校は社会資本生成のために必要とする新視点を述べた。

他に、教育史と部落史の接点について中村拓三、安川寿之輔、梅田修、川向秀武の仕事がある。とりわけ、川向と梅田の融和諸誌紙に密着した分析は、今日もなお継承を期待されている。

伊藤は教師のもつ努力が行政権力に吸収されていくこと（例えば戦時下の分析で「盛真の分析」）、今日の

教育史学会での「部落」の後退に危惧の念を記している。

一一 廣岡浄進は「宗教と部落」で調査地区三二府県二七五五地区一三万四七〇三世帯の大半が本願寺派に所属（一九六七年調）としている。一九七九年の全日本仏教会議理事会理事長の部落差別消滅発言は、差別戒名の存在などを例に広い批判をまきおこした。キリスト教は賀川豊彦批判もあり宗教体質が問われた。すでに、一九九〇年代以前から仏教は藤谷俊雄、里内徹之、キリスト教では工藤英一らがいた。その後、竹中正夫（岡山）、友寄景方（東京）、鳥飼慶陽や田中和男（奈良・京都）、萩原俊彦（関東）の人物追求を記している。

本願寺教団の動きを日野賢隆、北川健、布引らが述べていること、奥本の仏法論争（三業惑乱）と大同心会の水脈のつながりを述べ、近世の真宗と融和団体生成の関係をあけているのは重要である。

水平運動と黒衣同盟（本願寺批判の真宗僧侶たち）は、さらに三浦参玄洞研究（浅尾篤哉）や西光万吉研究（近藤祐昭、泉惠機ら）にまで拡大している。ところで廣岡は、「同族寺院の黒衣同盟」というときの「同族」、共同性の根拠を問うている。

一二 本郷浩二「部落改善運動と政策」で本郷は成澤榮壽の先駆的業績についてふれ、運動の自主性と官制的性格について述べ、成澤は自主的性格を重視したとする。この伝統は松尾尊允の「改善主義」から「解放」（水平社）への展開重視となったという。ところが最近、改善運動や融和運動の独自性をみる研究が始まった。秋定から始まり朝治、布川、本郷らの方向である。奈良県の豊富な研究事例（井岡、吉田）がそれで、他に広島、岡山、長野、関東地方などの事例がある。これまでのように中央からの改善施策を中心にみようとする動向は藤野の体系化の試みがあり竹永、八箇の研究も深化をともなっている。

一方、関口は改善運動と水平運動の内的関連性を主張した。これまでの研究史の反省を迫るもので、手島、守安敏司、朝治、秋定の賛同を与えるものである。

一三 井岡康時「大正デモクラシーと部落問題」では、重松正史の提示した保守政界に共存対抗する大日本国粋会と水平社の存在であろう。ここでは水平社の革新性が現実性へと転回しておりシヨックをうける。この点は、奈良を事例に守安が述べていることで、全国各地で同様の事例は多いと思わ

れる。

一方、知の世界でもこの期の柳田国男に対して有泉貞夫らの言及があり、今後の追求がまたれる。また喜田貞吉論も秋定、成沢、上田正昭らが論を進めている。喜田の主宰誌『民族と歴史』は平山和彦、朝治、吉田、のびらの新しい指摘がある。さらに菊池山哉の「特殊部落論」などの究明が残っている。

米田庄太郎も田中和男や広川禎秀の生育歴、大学での研究、弟子の大阪・京都市行政の部長連などの研究は今後の期待がまたれると井岡は指摘している。また、この期のジャーナリスト前田三遊、難波英夫、三浦大我、草間八十雄、宮武外骨、倉橋仙太郎などの分析をまつ人々は多いという。

一四 関口寛は「全国水平社の創立と初期水平運動」を担当し、八九年以降の二〇年間の成果をまとめている。

関口は、水平社宣言や各地の水平社創立状況、事情について、その多様な研究成果をまとめ、紹介している。人物研究も、西光万吉、阪本清一郎、南梅吉、平野小劔、栗須七郎、米田寛、三浦参玄洞らの研究を紹介している。知識人をめぐる部落問題

の周辺（縁）像は、まだまだこれらの課題である。

一五 守安敏司「水平社運動の展開」は、これまでの左派・アナ派・社民史観による思考軸の動揺が始まっているという。そして水平社の民族主義的傾向や一般民との異同性、女性差別との関係性を奈良の土壌に基盤をおいた分析の必要性を述べている。また、水平社内部の諸潮流や動向を整理し、一九八九年以降の研究史の整理を試みている。

八九年の研究では「社民左派史観」で補い、さらに藤野豊の「水平運動の社会思想的研究所」の果たした成果と課題を高く評価している。ついで〇二年の朝治、藤野、黒川、関口らの「水平社伝説」からの解放の討論を高い位置をしめるものとしている。またキム・ジョンミの民族差別批判、今西の「ジェンダーとの関連」など広い作業がなされることを問うている。他に、独立系水平社として福岡の自治正義団や婦人水平社の活動（福岡・関東・信州）の再検討、山田孝野次郎らの実像、部落委員会活動や高松事件の実像を問うている。廣畑研二の研究は栗須七郎の活動とそれによって引き起こされたとする「暴力行為等処罰二関スル法律」の成立過程と本質を述べてい

るとする。

最後に、守安は八九年の藤野の研究は生き延びること、水平社への過度の期待、「党派的世界観」の排除を述べ、「運動の実像の再生とその評価」を求めている。

一六 吉田文茂「普選体制と無産運動」によると一九八九年ごろの研究動向では社会民主主義（大正デモクラシー）に関心があったが、今日では水平社は既成政党との結びつきや政治的進出に向かおうとする事例を多く紹介されている。かつての革命的な労・農・水の「三角同盟」的視点については再検討されるようになっていくこと。また、一九三〇年代の水平社を革命的組織に変えようとする動き（水平社解消論）や社会民主主義的組織に変えようとする動向（部落委員会活動）も戦時下に入って失敗したことも述べている。

一方、部落民の主体性は国家の統合政策に吸収され、「異化」と「同化」の視点も「同化」の方向に接近したという。普通選挙に参加して解放をはかろうとする部落民や水平社の方向についての研究はこれからであるとする。その一端は兵庫、奈良、福岡の事例にみられるとし、「三角同盟」の内部分析に期待している。

なお、全水の社民系組織や人物

にも一般社会運動との連繋の可能性があることに言及している。

一七 手島一雄「融和政策と融和運動」で、手島は融和運動研究の質的転換について一九八九年前後に始まったと記している。その後、手島はまとまった大著として自身も関係した『三好伊平次の思想的研究所』と『山本政夫著作集』をあげている。期せずして戦前の融和運動・事業参画者の二大巨人像が出版されたのである。なお、手島によると三好の自宅には未刊の貴重資料がまだ残されており今後が期待される。山本政夫の論集も二〇〇九年に刊行され検討をまつている。

他に融和運動の人物像についても有馬頼寧を秋定、藤野、白石が論述している。小論ではあるが、岡本弥、前田三遊、生江孝之らについても論者が重ねられている。留岡幸助については差別問題の視点でなく社会事業家としての研究成果が発表されている。和歌山の藤範晃誠を重松らが、神奈川県青和会を大高俊一郎が、その独自性を問うている。山口の姫井伊介につき布引などが成果を出している。手島によると、朝治、秋定、一盛らの戦時下の融和運動についてもその対峙が始まっているという。そして「政策史と水平運動史と融

表2 「近現代部落史」関係主要史料集一覧

分類	編者	タイトル	出版社	刊行年
全国	全国解放教育研究会	『部落解放教育資料集成』全13巻	明治図書出版	1979-83年
	原田伴彦他	『近代部落史資料集成』全10巻	三一書房	1984-87年
	渡部徹・秋定嘉和	『部落問題・水平運動資料集成』全5冊	三一書房	1973-78年
	部落問題研究所	『戦後部落問題の研究』1-4巻	部落問題研究所	1978-79年
	部落解放研究所	『史料集 明治初期被差別部落』	部落解放研究所	1986年
	部落解放研究所	『資料占領期の部落問題』	部落解放研究所	1991年
	解放新聞社	『解放新聞』縮刷版	解放新聞社	
	部落問題研究所	『部落』復刻版	部落問題研究所	1983年
	部落解放研究所	『部落解放運動基礎資料集』1-4巻	部落解放同盟中央本部	1980-81年
	部落改善運動	兵庫部落問題研究所	『明治之光』全3巻	兵庫部落問題研究所 (復刻版)
水平運動	全国水平社	『水平』・『水平新聞』	世界文庫・水平新聞刊 行会(復刻版)	1969年
	全国水平社青年同盟	『選民』	世界文庫(復刻版)	1969年
	部落問題研究所	『水平運動史の研究』全6巻	部落問題研究所	1971-73年
	田宮武	『新聞記事からみた水平社運動』	関西大学出版部	1991年
		『初期水平運動資料集』1-5巻・『解説』総 目次・索引』	不二出版(復刻版)	1989年
	廣畑研二	『戦前期警察関係資料集 初期水平運動』	不二出版(復刻版)	2006年
融和運動	西播地域皮多村文書研究会	『公道』全3巻・別冊	西播地域皮多村文書研 究会	1982-84年
		『同愛』全3巻	解放出版社(復刻版)	1983年
	中央融和事業協会	『融和時報』全6巻	三一書房(復刻版)	1982-83年
	中央融和事業協会	『融和事業年鑑』	部落解放研究所(復刻 版)	1970年
	中央融和事業協会	『融和事業研究』	部落解放研究所・世界 文庫(復刻版)	1973-74年
	中央融和事業協会	『更生』1-7巻	不二出版(復刻版)	1988年
	大阪人権博物館	『山本政夫著作集』	大阪人権博物館	2008年
その他	浄土真宗本願寺派同朋運動 本部	『同朋運動史資料』1-3巻、別冊、年表		1980-90年
	浅尾篤哉	『三浦参玄洞論説集』	一文字工房・解放出版 社発売	2006年
	北川鉄夫他	『部落問題文芸・作品選集』49巻	世界文庫(復刻版)	1973-80年
地域史料集				
群馬県	東日本部落解放研究所	『群馬県被差別部落史料』	岩田書院	2007年
愛知県	松浦國弘	『愛知県・底辺社会史資料集成・部落篇』 全3巻	近現代資料刊行会	2008年
滋賀県	京都部落史研究所	『近江八幡の部落史』、『くらしとごと』	近江八幡市部落史編纂 委員会・近江八幡市	1992-95年
	野洲町部落史編さん委員会 他	『野洲の部落史』通史編・史料編、別冊参 考資料集、『人びとが語る暮らしの世界』	野洲町	1999- 2000年
京都府	京都部落史研究所	『井手の部落史』、『くらしとごと』、『年 表』	井手町部落史編さん委 員会・井手町	1986-89年
	京都部落史研究所	『京都の部落史』全10巻	京都部落史研究所	1984-95年
	大阪市立大学人権問題研究 センター	『資料集 上田静一と被差別部落 明治・ 大正期を中心に』	大阪市立大学人権問題 研究会	2009年
兵庫県	兵庫県部落史研究委員会	『兵庫県同和教育関係史料集』全3巻	兵庫県教育委員会	1972-74年
	兵庫県同和教育史研究委員 会	『同和教育史・兵庫県関係史料』全3巻	兵庫県同和教育協議会	1976-78年
	兵庫県部落解放運動史研究 会	『神戸の未解放部落』	兵庫県部落解放運動史 研究会	1973年
	兵庫部落問題研究所	『復刻・極秘特高資料 特別要視察人二関 スル状勢調 兵庫県特高課』	兵庫部落問題研究所	1976年
	三木市部落史研究会	『三木市部落史関係文書』第1-2巻	三木市教育委員会	1979-96年
	尼崎部落解放史編纂委員会	『尼崎部落解放史』本編・史料編	尼崎同和問題啓発促進 協会	1988-93年

	兵庫部落解放研究所	『兵庫県水平運動史料集成』	部落解放同盟兵庫県連 合会	2002年
奈良県	奈良県同和事業史編纂委員 会	『奈良県同和事業史』	奈良県	1970年
	奈良市同和地区史的調査委 員会	『奈良の部落史』史料編	奈良市	1986年
		『警鐘』	不二出版(復刻版)	1988年
	「(仮称)水平社歴史館」建 設推進委員会	『創立期水平社運動資料』全5巻	不二出版(復刻版)	1994年
	奈良県部落解放研究所	『奈良県部落解放史年表』	奈良県部落解放研究所	1996年
	奈良県立同和問題関係史料 センター	『奈良県同和問題関係公文集()』	奈良県教育委員会	1996年
	奈良県立同和問題関係史料 センター	『大和同志会日誌』	奈良県教育委員会	1997年
	奈良県立同和問題関係史料 センター	『日新新聞』	奈良県教育委員会	1999年
	奈良県立同和問題関係史料 センター	『大和国宇陀郡岩崎村関係史料』	奈良県教育委員会	2002年
	奈良県立同和問題関係史料 センター	『大和国高市郡洞村関係史料』	奈良県教育委員会	2004年
	奈良県立同和問題関係史料 センター	『初期奈良県水平社関係史料』	奈良県教育委員会	2006年
	奈良県立同和問題関係史料 センター	『大和国葛上郡関係史料』	奈良県教育委員会	2007年
	奈良県立同和問題関係史料 センター	『大和国添上郡西辻村関係史料』	奈良県教育委員会	2008年
	新井勝紘・守安敏司	『国立歴史民俗博物館研究報告第99集 近代社会における差別の史的研究』	国立歴史民俗博物館	2003年
大阪府	奥田家文書研究会	『奥田家文書』全15巻	大阪部落解放研究所	1969-76年
	奥田家文書目録刊行会・ 奥田久雄	『奥田家文書』「総目次・索引」	比叡書房	1982年
	南王子村文書刊行会	『大阪府南王子村文書』全5巻	部落解放研究所	1976-80年
	池田市教育委員会	『池田市古江町郷土史資料 森家文書』	池田市教育委員会編	1974年
	部落解放研究所	『復刻 東雲新聞』1~4巻・別巻	部落解放研究所	1975-77年
	大阪同和教育史料集編纂委 員会	『大阪同和教育史料集』全5巻	部落解放研究所	1982-86年
		『ワシラノシンブン』	不二出版(復刻版)	1990年
	箕面市史改訂版編さん委員 会	『改訂 箕面市史 部落史』本文編・史料 編	箕面市	1995- 2005年
	大阪の部落史委員会	『大阪の部落史』全10巻	部落解放・人権研究所	2001-09年
和歌山県	和歌山県同和委員会	『機関紙『同和』復刻版』全3巻	和歌山県同和委員会	1988-96年
	田辺同和史編さん委員会	『田辺同和史』第1-4巻	田辺市	1995- 2002年
	和歌山県同和委員会	『和歌山県同和運動史』通史編・史料編	和歌山県同和委員会	1995-98年
三重県	三重県厚生会	『三重県部落史料集』近代編	三一書房	1974年
	労働運動史刊行委員会	『愛国新聞』	労働運動史刊行委員会 (復刻版)	1975年
		『愛国新聞』	不二出版(復刻版)	1990年
	桑名市同和教育資料編集委 員会	『同和教育資料 人権のあゆみ・桑名』本 文編・史料編	桑名市教育委員会	1991-95年
	四日市市	『四日市の部落史』1-4巻、史料編近現代 補遺、四日市部落史聞き取り調査報告書	四日市市	1996- 2001年
広島県	小早川明良	『広島県地域の部落史、部落解放運動史 年表草稿』(近代編)	福山部落解放研究会	1980年
	広島県立図書館	『広島県部落問題年表 - 広島県立図書館 所蔵資料にみる部落問題 - 』	広島県立図書館	1986年
	広島県共鳴会	『共鳴』(第二次『共鳴』)	広島県共鳴会機関紙 『共鳴』復刻委員会(復 刻版)	1978年
	広島県共鳴会	『共鳴』(第一次・第二次『共鳴』)	福山部落解放研究会	1997年

四国	四国部落史研究協議会	史料で語る四国の部落史 近代編	明石書店	1994年
愛媛県	高市光男	愛媛近代部落問題資料 上・下巻	近代史文庫大阪研究会	1974-80年
徳島県	池田町教育委員会・池田町同和教育推進協議会	『改訂版 池田町を中心とした部落史編年資料集』	池田町教育委員会・池田町同和教育推進協議会	1973年
高知県	部落史資料作成委員会	『高知の部落史 - 資料編第二集 - 』	高知県同和教育研究協議会	1983年
	美馬敏男	『近代高知県部落史資料二』		1987年
福岡県	北九州部落解放史編纂委員会	『北九州部落解放史資料』近代(1) - (3)、現代(1)	北九州部落解放史編纂委員会	1980-85年
	全九州水平社	『水平月報』	福岡部落史研究会(復刻版)	1985年
	松崎武俊・松崎武俊著作集編集委員会	『警察史・竹槍一揆史料 松崎武俊著作集下巻』	葦書房	1988年

紙数の関係で、主要なものだけに限定した。さらに地域部落史・史料集などは膨大なため、近現代の史料集・年表があるものに限定した。

であろう。これは、戦後の部落問題に関わる運動・行政・教育の基本的史料が掲載されており、戦後史を研究するには通読が必要だろう。しかも出典がきちんと記載された年表があり、基本的な知識や流れを身につけることができる。

その他、GHQの『日本占領文書』の主要なものを復刻・翻訳した『資料 占領期の部落問題』がある。そして、戦後の被差別部落の運動や状況を知るには、雑誌『部落』や、『解放新聞』の復刻版を検索することはまず最初の作業として不可欠なものである。さらに中央レベルの部落解放同盟の動きは、『部落解放運動基礎資料集』で確認することができる。

第二に水平運動関係史料をとりあげよう。これに関して言えば、全国水平社の機関誌は言うに及ばず、各地域の主要な水平社組織の機関誌も多くが復刻されている。例えば、全九州水平社の『水平月報』をみながら、全国水平社の機関誌である『水平新聞』と比較することも容易であるし、さらにほかの地域の水平社の機関誌とも比較することが可能である。他の社会運動史研究で、これだけ各地域の運動体の機関誌が復刻されている研究分野は多くはない。

まず、最初に『水平運動史の研究』の資料編・年表と『部落問題・水平運動資料集成』を併読しよう。全国的な水平運動と融和運動の関

係を俯瞰することができる。ただし、後にも触れるように、現在ではこの二つの史料集に掲載されている多くの史料の原本が公開され利用可能になっている。またまとまった形で復刻されたりしているものも多いので、確認をし、できるだけ原本を利用することが必要であろう。一つだけあげれば、『社会運動通信』は、『部落問題・水平運動資料集成』の補巻に収載されているが、いまでは、不二出版から復刻版が刊行されている。できるだけ原本をあたって研究することが重要である。

全国水平社の機関誌である『水平』・『水平新聞』も復刻されているし、組織内組織ともいえる全国水平社青年同盟の機関誌である『選民』も復刻されている。特に重要なものは、『初期水平運動資料集』の刊行であろう。この史料集の刊行前には、三重県水平社・全九州水平社・奈良県水平社の一部の機関誌しか復刻されていなかった。

しかし、この史料集には、一九二〇年代という限定はあるものの、奈良県の各地水平社・群馬県・山口県・大阪府・兵庫県・関東水平社の機関誌が復刻された。また全国水平社内組織内組織・個人誌・文芸誌・水平運動の情報伝えるメディアや水平社の対抗組織の機関誌類も復刻している。他にも三重県の水平運動機関誌類の復刻版である、『愛国新聞』(不二出版のも

のは後続紙も収録しているためこちらを利用すること)。大阪の『ワシラノシンブン』なども復刻されている。今後も各地の地域水平社機関紙の地道な復刻と、水平運動の情報も多く含む『同和通信』の復刻が望まれる。

その他、新聞記事を翻刻した『新聞記事からみた水平社運動』や、兵庫県の水平運動関係資料にしばった『兵庫県水平運動史料集成』がある。また水平運動研究では、『特高月報』、『社会運動の状況』などの特高関係史料の利用が不可欠である。そんな中、廣畑研二による『戦前期警察関係資料集 初期水平運動』が刊行され、貴重な史料集となっている。

第三に融和運動関係史料である。部落改善運動のまとまった史料集は、『明治之光』の復刻版が存在する。次に三協社の『警鐘』も復刻版を手にとることが出来る。また、全国的な融和運動関係団体である帝国公道会の『公道』、同愛会の『同愛』も復刻版で見ることが出来る。

一九二〇年代後半以降も中央融和事業協会の『融和時報』(後に『同和国民運動』)・『融和事業研究』・『融和事業年鑑』も復刻されており、全国的な融和運動・融和事業の状況を俯瞰することが出来るだろう。また、『融和時報』の地方版をみれば、各地の融和運動・融和事業の状況も明らかにで

きる。部落経済更生運動の様子について『更生』が復刻されており、容易に知ることが出来る。また中央融和事業協会の主要人物の一人であった山本政夫については近年『山本政夫著作集』が刊行された。

また、浄土真宗本願寺派の融和運動・融和事業に関しては『同朋運動史資料』の資料編・年表がある。この史料集は、非常に目配りがいきとどいていて、浄土真宗大谷派の流れも一定程度追うことが可能になっている。仏教系の融和運動・事業の研究するには必読の史料集である。そして、近年、全国水平社創立にも関与した真宗僧、三浦参玄洞の論説集も刊行された。

今後、融和運動関係史料では、中央融和事業協会成立以前の状況についての史料である全国融和連盟『融和運動』、中央社会事業協議会地方改善部『融和』の復刻が望まれる。地域融和団体については、現在のところ広島県共鳴会『共鳴』、和歌山県同和委員会『同和』が復刻されている。さらに兵庫県清和会『清和』、神奈川県青和会『青和』が多く残存していることが知られており、復刻版として史料集が刊行されればさらに研究の幅が広がり、一般の歴史学研究者にも発信することが可能であろう。特に地域融和運動の機関紙類の復刻が今後も重要である

う。

第四に『部落問題文芸・作品選集』をとりあげたい。これは部落問題に関わる文芸作品を復刻したものである。部落問題がどのように社会に受容され、ふたたび文芸作品というフィルターを通じて発信されたのかを理解するには必読のものである。これ以降は『部落問題と文芸』や『部落問題研究』で作品紹介が続けられているので、参照してほしい。

第五に地域部落史関係史料集である。紙数の都合で主要なものしか、とりあげることができなかつたが、この他に各集落レベルの「地域部落史」が多くある。これらの史料集は、表2を見てもらえばわかるように、西日本に著しく偏っている。そんな中、群馬県の『群馬県被差別部落史料』は、被差別部落の家文書の翻刻である。これが極めて貴重なのは近代の史料も含んでいることである。関係者のご協力に敬意を表したい。愛知県は新聞史料の集成である『愛知県・底辺社会史資料集成・部落篇』がある。これで愛知県の近代部落史の研究水準は飛躍的に向上する基盤が整ったといえよう。

さて、京都部落史研究所『京都の部落史』を嚆矢として、各地で通常の自治体史編纂事業と同レベルの経費をかけ、専門研究者が史料整理・保存・公開や執筆を行う形の地域部落史編纂事業が行われ

ている。紙数の関係で詳述しないが、西日本の滋賀県・京都府・奈良県・大阪府・三重県などでこのような形の部落史編纂事業が行われ、史料の蓄積や、史料集の刊行が行われている。個別自治体単位の部落史編纂事業も行われている。近年では和歌山県の部落史編纂事業が継続されており、その成果である『和歌山の部落史』編纂会『和歌山の部落史』は明石書店から刊行予定である。

後、当然のことだが、近年では地域自治体史や、様々な関連史料集にも被差別部落関係の史料が掲載されているので、注意して見る必要があるだろう。さきに断つたとおり、表2で示した以外にも地域単位の史料集なども作られているので、地域の図書館や部落問題・

人権問題関係研究機関の資料室などで確認していただきたい。ただ、憂慮するのは図書館や資料館などによつてはこのような史料集が閲覧不可・閲覧制限になっていたり、そもそも書架に並んでいないといったことが散見される。このようなことは地域住民の知る権利を奪うし、人権問題の解決のためにも百害あつて一利なしである。公開しなければそもそも史料集や地域部落史を作る意味はない。マイノリティの存在を組み込んだ地域史像・地域社会像の構築のためには、原則的な公開が必要不可欠なものなのである。

2 一次史料はどこで探し、利用するのか？

さて、研究テーマに関係する史料集をひととおり、読み込めただろうか。次は一次史料や復刻されている以外の史料をどのように利用するかである。

残念ながら、「近現代部落史」の専門研究者とされている人々は、史料集をめぐっただけという悲惨な論文ばかり書いている者が非常に多いことに驚かされる。史料集は手抜きをするための手段ではない。それを踏まえて、せめて地域の新聞史料や行政史料・地域史料・ヒアリングなどを組み込んだ研究を望みたいものである。被差別部落関係史料だけ眺めていても、被差別部落の歴史は本当の意味で永遠に理解できないだろう。

とはいえ、一次史料が、通常の資料館や公文書館のように閲覧・利用できる環境にある地域は極めて少ない。管見の限り、通常の歴史学研究のレベルで利用する地域史料が閲覧・利用可能な地域はほとんどない。なんのコネやツテもない一介の在野研究者である私など、部落問題関係史料が豊富に発掘され、研究目的なら誰でも利用可能な環境と実証的な多くの研究蓄積のある稀有な地域」(拙稿「一九五〇年代「京都」における失業対策事業・女性失対労働者・被差別部落」『日本史研究』五四七号、二〇〇八年三月、一一八頁)である京都を

ワールドにしなければ、今以上に水準の低い論文しか書けなかつたろう。

やはり、史料の収集と公開といったところでは、地域部落史編纂事業が完結あるいは、継続した史料収集を行っているところに期待するほかない。私の個人的な見解では、現在のところ、ごくふつうの歴史研究者が「近現代部落史」関係史料を、通常の公文書館や史料館のように閲覧・利用でき、被差別部落の史料を組み込んで歴史叙述をおこなえるのは、京都と奈良である。部落問題研究所・京都部落問題研究資料センター・奈良県立同和問題関係史料センターの三機関は、部落問題関係史料のアーカイブ機能を十分に果たしているといえよう。現在のところ、各地で行われている地域部落史編纂事業も公開を前提に史料収集・保存を行わなければならないだろう。私も全ての機関について、熟知しているわけではないので、史料の閲覧・公開条件の詳細については各機関に問い合わせたい。

史料収集という点では、大阪や兵庫も膨大な蓄積をもっているが、アーカイブ機能と言う点では、京都や奈良に著しく劣る。特に『大阪の部落史』編纂事業で収集・整理された史料の原則的な公開がいつ・どのような形で可能になるのかにかかっているだろう。編纂事業担当者の一人である崎谷裕樹も

「収集した史料は、きちんと整理をおこなった上で、誰もが研究目的のためなら利用できるような状態にしていかなければならない」(崎谷裕樹「編纂事業に携わって」、『ヒューマンライツ』二五六号、二〇〇九年七月、一六頁)と述べている

ので、大いに期待することとした。もう一つは水平社博物館と大阪人権博物館の収蔵史料である。両館とも極めて重要な一次史料の宝庫であり、多くの研究に利用されている。だが、博物館という性格もあり、アーカイブ的機能は十分でない。ごくふつうの「関係者」以外の人々が所蔵史料を知ることができるのは、いまのところ展示図録ぐらいのものである。所蔵史料目録の公開・公開が今後は求められてくるだろう。

以上、「近現代部落史」関係の史料利用について、必要と思われることについて述べた。あえて繰り返すが、マイノリティの存在を組み込んだ地域史像・地域社会像の構築のためには、研究目的なら誰でも史料の利用が可能な環境と、原則的な史料公開が不可欠である。また、多くの方々のご意見・ご批判がいただければ幸いである。

(続く)

本の紹介 高野昭雄著

近代都市の形成と在日朝鮮人

金森 襄作

(京都部落問題研究資料センター運営委員)

京都市への朝鮮人の定着に関して、部分的に言及した論文は今日までいくつが存在する。しかし、極めて簡単な概括的なものか、あるいは部分的なものにすぎなかった。中には全体像をゆがめるものさえあり、定着過程全容を正確に知ることのできるものはほとんど無かつたのが実情であつた。

その要因として、第一に資料が少ないことがあげられる。信じられない程度少ないのである。大阪は別問題にして、六大都市にあつて人口比率からみれば京都市の朝鮮人は少ない方ではなかつた。一九二七年頃から急増しはじめ一九二八年には約一万二千人、三二年には約二万三千人、三七年には約四万二千人と、実に人口の四%近くを占めるまで増加していった。それは未解放部落の人数の三倍程に達していたのである。それにもかかわらず資料はほとんどない。

例えば京都市社会課報告をみれば、朝鮮人資料はわずか二冊が残

されているにすぎない。そのため、朝鮮人の細かい定住地区・住居状況・生活実態など詳しく知りようがない。雑誌や新聞記事なども非常に少なく、これでは本格的な研究をしようにも手のつけようがない状況にあつた。

このような中で高野氏は、国政調査やほとんど使われてこなかつたいくつかの資料を丹念に整理し、京都市への朝鮮人の定着過程の研究を一貫して積み重ねながら、順次に論文を発表してこられた。そして、それらをまとめて今回、一冊の本として世に出されたのが本書である。まず、その努力に対して敬意を表さざるをえない。勿論解明されていない課題もいくつが残るが、それは資料的制約によるものであつて、端的にいうと今後これ以上の仔細な研究は期待できないとも言える内容であつた。ともあれ、今後京都の朝鮮人問題を考える上で、欠かすことのできる著作となつたことは疑う余地がない

無く、高野氏の努力は高く評価されなければなるまい。

本書は、朝鮮人定着過程を全体的・包括的に経緯を明らかにしようとする第一部と、各個別問題を解明しようとする第二部から構成されているが、これを順次簡単に紹介しながら、そのつど問題点も指摘していききたい。

第一部 京都の近代化と都市下層

第一章 市域拡張と都市下層

京都市への朝鮮人の定住人数の累年統計や各区単位の人数分布表などは残されているが、それより細かい地域となると全く存在しない。そこで高野氏は、「国勢調査」や京都府社会課「少額生活者に関する調査」などを使い、学区単位の貧困者の分布状況を解明することによって朝鮮人の定着状況を割りだそうとした。この資料には朝鮮人の数が含まれていたからであつた。朝鮮人全てが貧困者ではないはずなのに、間接的で曖昧なこのような方法を何故取つたのか、と疑問に感じる人もいようが、学区単位の具体的な統計や資料が無い状況にあつては、ひとつの有効な方法であつたといえよう。

この分析の結果、旧市街地においては、八大部落(三条・錦林・養正・楽只・壬生・崇仁・竹田・深草)が百戸以上の不良住宅地区の大半

を占めた。また、この部落地区やその周辺に朝鮮人が多く密集しており、その地域の人口の約5%を占めていた事実を明らかにした。

ところが、一九一八年と三一年からの二度の市街地拡大に伴つて、不良住宅地区は西北の西陣周辺地域や西南の新興工業地域へと拡大していった。一地区毎では百戸未満五十戸以上と、少し規模は小さくなるものの、貧困層は明らかにこれら市周辺地域に広がつていった。そして、この地域には人口増加数の実に七、十%を朝鮮人が占めていたことをも高野氏は明らかにした。

今日まで一般的に、京都市の不良住宅地域といえは、八大部落だと思われてきた。そして京都市の朝鮮人の多くもこの部落の周辺に主として居住していた、ともいわれてきた。しかし、高野氏の分析によつて、今日までの一般的な見解は全面的に修正されなければならぬことが判明した。この事実は画期的なことだといえよう。

第二章 工業化と都市下層

高野氏は次に、少額生活者が多い地区を全市的に割り出していった。まず、西陣機業地域の分析から始まる。西陣機業は数十の手工業的分業から成立しているが、その中心となる機織地域が、一九二〇

年代から上京区や右京区など西陣周辺部に急速に拡大していった。とりわけ、賃機は下級長屋に併設される場合が多く、その結果この地域に貧困者居住地が多く形成されていった。

また、下京区の新興工業地帯などや京都駅周辺での分析も行われ、そこでも同様の結果が生まれていった。

かくして、戦前の京都市の下層貧困者は、八大部落・西陣周辺・駅周辺をふくむ南西新興工業地帯に広く分散して存在し、また朝鮮人もこれらの地域に広く分布していたと高野氏は結論付けた。

第三章 不良住宅密集地区

第二章でみた不良住宅密集地域を、より細かな学区別に抽出していった。まず、百戸以上の不良住宅地区は十一地区あつたが、その内八カ所は八大部落が占めた。しかし、百戸未満五十戸以上の不良住宅地区の十五カ所は、上京区や東九条・下京区など新市街地に新たに形成され、その町名まで分布状況が抽出された。

先に言及したように、このような方法を取らざるを得なかつたことは理解されるものの、やはり論述内容は朝鮮人の定着過程よりも低所得者の分布状況の解明だけに重きが置かれてしまつた感は歪めない。

言い換えると、定着後の朝鮮人の分布状況は明確にわかるが、定着経過はよくわからないということである。

言い換えると、本来の目的である朝鮮人形成史の視点、即ち、いつ頃・どの地区で・どのように朝鮮人が定着し始め、そして、どのようにして他地域に拡大していったのか、可能ながざり言及してほしかつたということである。もし、高野氏の研究が第一部だけで終わっていたら、資料的限界のため、この結論だけでも仕方なかつたかもしれない。しかし、実際には次の第二部において高野氏は、朝鮮人多住地域の個別的分析をめぐりに行なつて貴重な成果を各章ごとに述べておられるわけであるから、一冊の本にまとめられる時、双方の成果を合わせ、かつ新たに加筆して、この結論部分において京都における朝鮮人の定着過程を大胆に提言された方が良かったのではないかと思える。

高野氏の研究を一読してこの点を強く感じた私は、高野氏の成果を取り入れながら、バラック小屋密集地を中心に朝鮮人の定着化が行われた他都市と異なつて、京都ではその八割が借家あるいはその借間であつた事実にも着目しながら、京都における朝鮮人の定着過程の概要を大胆に述べてみた。二

〇〇八年十二月五日に開催された「部落史連続講座」での講演「京都における在日朝鮮人の形成」（京都部落問題研究資料センター刊、二〇〇八年度部落史連続講座 講演録）に所収）である。

それはさておき、高野氏の研究によって、京都市の不良住宅地区は部落だけに集中しているのではないことが実証されたが、それは画期的な事柄だったといえる。即ち、高野氏は言及していないが、そのことは次のような重要な内容をも客観的に持っているからだ。

部落解放運動側や部落史研究者たちの多くも、部落地域こそが京都市における最悪の劣悪地域であって真先に改善されるべき場所と主張してきた。また行政側もそれを認め、今日まである程度その改善事業にも取り組んできた。そのことは正当だったとしても、決してそこだけに留めてはならず、劣悪な地域の存在する都市周辺地域までぜひとも拡大させなければならなかった、ということである。劣悪地域は市周辺部にも多く存在していたにもかかわらず、もし改善事業を部落地域だけに限定したとしたら、それは部落第一主義だという批判に答えられなくなる、ということである。

第二部 京都市域の拡張と朝鮮人

第四章 京都経済と朝鮮人労働者

他の六大都市と比較しながら京都市全体の朝鮮人の職業分析が行われた。その結果、西陣織関係と土木・雑役の二部門に従事する朝鮮人が京都では圧倒的に多かった。

第五章 在日朝鮮人の就業状況

八大不良住宅地区と新都市地域での朝鮮人の職業の分析が具体的に行われた。

第六章 被差別部落と在日朝鮮人

崇仁地区を事例に

被差別部落への朝鮮人の流入経過を崇仁地区に限定して行った。ここで高野氏は誰も留意してこなかった学校の「学齢簿」に着目し、これを利用した。それには親の住所や職業や・出身地などが記載されている故に、他の資料からでは分からない学区内での朝鮮人の具体的な実態が判明したのである。

この章の結論のみ述べれば、京都駅近くに位置する崇仁地区では都市拡大に伴って滋賀県・奈良県など他府県からの大量流入を見越して安価な賃貸長屋を多く建てたところが期待した程の流入はなく空家となつて残った。そこで朝鮮人を入居させたところすぐに埋まり、また部落周辺の空き地にも新たに長屋が建てられ、かくして朝鮮人密集地が形成されていった。

また、入居朝鮮人の職業の多くは土木建築関係であったというものであった。

見事な分析で、本書の中で最も高く評価できるところだと私は考える。何故京都において部落周辺に朝鮮人が定着したのか、この分析によって初めて解明されたのであった。ただ、駅から遠い他の部落でも同様の経過だったのかを断定するには、もう一ヶ所程の検証が必要であったようにも思える。再度述べれば、京都では朝鮮人が部落内またはその隣接地域に生活することが当然のことだと思ってきたのが、実はそれは京都だけの特殊な事柄で、他府県ではほとんど例をみなかった。大概是部落とは無関係な劣悪地で、バラック小屋密集地を独自に形成していったのが一般的な形態であった。この京都の特異性を高野氏が見事に解明されたわけで、画期的な内容だといふのである。

また、慎重な高野氏はこの章の結論を述べるにあたって、資料からいえること以外は述べず類推的な言及も一切避けておられる。しかし、その分析結果は、客観的に次のような重大な問題をも内包しているといわざるをえない。即ち、部落の者が長屋を建て、多くの朝鮮人を入居させながらそこから利益を得ていた事実、そして、部落

の土木・建築の親方がこれら朝鮮人を多く雇用して、そこでも利益を得ていた事実である。

即ちそれは、「部落民」差別される者」とみなしてきた今日までの視点だけで十分なのか、という問題である。対朝鮮人との関係からみると、明らかに逆の立場になっている。身分的差別と民族的差別の重層、今日までこの問題に対してほとんど誰も言及してこなかったが、部落問題研究者はこの課題に対して、今後ぜひとも深く追及していつてもらいたいものだ。

第七章 吉祥院地区における朝鮮人の流入過程

桂川、天神川の工事や桂川砂利採掘に従事する朝鮮人が、この地でバラック小屋を立て、密集地を形成していった経過を丁寧に整理された。バラック小屋密集地の京都での代表地の一つがここである。

第八章 上賀茂地区における朝鮮人労働者 すぎき・屎尿・砂利

上賀茂は古くから「すぎき漬」の産地で、そのすぎき菜の栽培には肥料として大量の屎尿を必要とした。その汲取に多くの朝鮮人が従事した事実を明らかにした。これは高野氏が初めて明らかにしたことであったが、一九三〇年代に

入ると急に姿を消してしまった。市内の尿管専門業者の中に流入したのか、他に転職したのか、資料が残されていないためなのかこの点には高野氏は言及できなかった。

以上で、本書の紹介とその所感を終える。文頭で述べたように、京都市の朝鮮人定着史に関しては今後、本書以上の仔細な研究は出てこないと思われる程の貴重な内容であったにもかかわらず、一読して何か釈然としないものが残ったのは何故なのか。それは、おそらく次の二点が解明されなかったためではなからうか。

第一は、東九条の朝鮮人問題が欠如していることである。ここは京都の最大の朝鮮人密集地で、その地域の人口の実に三〇%を占めていた。高野氏もおそらく十分にわかっていただであろうが、資料がほとんど残されていない故に放置せざるをえなかっただけのことである。仕方ないことであるが、戦後には調査が行われているのでぜひとも誰かの手で、戦後の実態研究が早急に行われることを期待したい。

第二に、西陣の朝鮮人問題の欠如である。三十年代後半、京都で朝鮮人が最も多く従事した職業がこの西陣織関係であった。京都に多数の朝鮮人が定着できたのも西陣織が存在したからでもあった。

しかし、高野氏も十分わかっていながらも、資料があまりにも少ないため放置せざるをえなかった、と推察される。

それ故か、高野氏は今春、「戦前期京都市西陣地区の朝鮮人労働者」(『世界人権問題研究センター研究紀要 第十四号』、二〇〇九年三月)を新たに執筆された。この論文では、西陣織への朝鮮人労働者の流入に対する全体的な概要と、過半数を朝鮮人が占めたヒロード織(主として下駄のはな)部門での分析そして、そこでの争議などを発表された。私も、「西陣織と朝鮮人」(『京都部落問題研究資料センター通信』第十四号、二〇〇九年一月)で西陣織の中で朝鮮人が最も多く従事した染色業と賃機業への進出経過を中心に発表した。しかし、双方ともまだ不十分だといえよう。今述べた資料不足に加え、西陣織全体の工程があまりにも複雑なため、経済史専門家でないとなかなかたいと側面も存在するからである。

京都の主要産業であった西陣織とそれを支えた朝鮮人の実態、それにもかかわらず今日まで放置され続けてきたことを考える時、ぜひとも本格的な研究を早急に行ってほしいものである。

(佛敎大学発行、人文書院発売、〇九年三月、七六〇〇円)

部落史研究の見取図は描けたか？

寺木伸明・中尾健次編著

『部落史研究からの発信』第1巻 前近代編を読んで

奥本武裕

(奈良県立同和問題関係史料センター)

『部落史研究からの発信』全三巻は、部落解放・人権研究所の創立四〇周年記念事業の一環として出版された。本書はその第一巻前近代編である。三巻に共通して付されている「刊行にあたって」で編者のひとり寺木伸明氏は、企画の趣旨について次の三点をあげている。

部落史だけではなく、多様な被差別民の歴史における重要なテーマを取り上げ、それぞれについて研究史の整理を行い、現時点での成果と今後の課題を提示したい

その作業を通じて他分野の歴史研究に何らかの発信をしたい

これらの研究分野の歴史研究に関心を持つ人々が研究を行っていくうえでの手掛かりを提供したい

現時点での部落史研究の見取図を提示しようということになるだろうが、部落史研究の現状では、後述するような理由からそれは極

めて困難なことではなかったろうか。『部落解放研究』が第一三五号(二〇〇〇年)の「近代部落史研究の現状と課題」を、『部落問題研究』が第一五八輯(二〇〇一年)の「二〇〇〇年部落問題研究の成果と課題」を、それぞれ最後にして年度別の研究状況の整理が行われなくなつたことにそのことが象徴されていると考えている(ただし、『部落問題研究』は第一六一輯と第一八〇輯で分野別の成果と課題を特集している)。そのような困難な作業に携わられた編者の寺木伸明・中尾健次両氏をはじめ、各論考の執筆者に深い敬意を表しておきたい。

さて、このような本書の性格に鑑みて、本稿では、収録された個々の論考についての論評ではなく、本書全体として前近代部落史研究(その周辺分野も含めて)の見取図を描くことに成功しているかどうかということについて検討し、そこから部落史研究の現状を瞥見して

みることにしたい。

まず、本書の構成を提示しておこう。

中尾健次「総論 戦後の歴史学と部落史研究」

考古・古代・中世

丸山真史・別所秀高・松井章「動物考古学と差別問題」

森明彦「三一権実論争と被差別民

心和の宗論をめぐる」

吉田徳夫「中世身分制度」

村上紀夫「中世被差別民と芸能」

近世1 身分制とかわた身分

寺木伸明「近世身分制」

藤井寿一「穢多・かわた・長吏」

中尾健次「弾左衛門支配について」

山下隆章「被差別民の生活 さまざまな生業」

藤沢靖介「斃牛馬処理と旦那場」

阿南重幸「皮革の流通 摂津渡辺

村と長崎」

藤原豊「仏教と差別 本願寺と穢寺制度」

間瀬久美子「河原巻物と由緒書」

近世2 多様な被差別民

高久智広「大坂の非人組織とその展開」

木下光生「身分的周縁論への向き合い方」

中村久子「近世被差別民と芸能

九州地方を中心に」

小野田一幸「古地図研究と被差別民」

本書の構成をみて、まず気づくのはテーマ選定のバランスの悪さだろう。

例えば古代に該当するのは森氏の論考一編だけだが、そのテーマが「三一権実論争」であることは首をかしげざるを得ない。天台宗と法相宗の間で闘わされたこの論争の余波で、往生伝の中で屠者と旗陀羅が同一視されるようになり、現実の屠者に対する觀念に仏典における旗陀羅についての觀念を付着させていくことになる。その論旨は興味深い、それはすでに研究史の整理を第一義とする本書の枠を超えた内容だろう。そもそも最近の研究状況をふまえれば、本書に「古代」が立項される必要は必ずしもなかったのではないだろうか。

また、「近世2 多様な被差別民」で具体的に取り上げられている多様な被差別民は、大坂の非人組織と九州の芸能に携わる被差別民なのだが、この分野で取り上げなければならぬテーマは他にも多くあったはずだ。例えば葬送に携わる三昧聖や呪術に携わる民間

陰陽師研究は近年大きく進展したが、なぜこれらのテーマが取り上げられなかったのだろうか。

また、身分的周縁論に関する論考と古地図に関する論考はいずれも興味深く学ぶところが多いが、この二編が「近世2 多様な被差別民」に収録されていることの意味も理解できない。両者ともにむしろ「近世1 身分制とかわた身分」に配されるべきものだろう。とりわけ木下氏の論考については「近世2」に置かれることで、身分的周縁論そのもの、あるいはそれと正面から向き合った木下論文の意義を矮小化することにつながってしまったのではないだろうか。

編者と編集部の間、あるいは編者と各執筆の間でどのような応答がなされたのかは知れないので、企画段階からこのような構成であったのか、結果としてこのような構成にならざるを得なかったのか、そうしたことは筆者には不明だが、以上のように本書の構成を検討してみると、本書全体として先の企画の趣旨が実現されているとは残念ながら難しいだろう。

ただ、部落史研究の現状からすれば、取り上げるべきテーマをもれなく取り上げ、適所に配したからといって、研究の見取図が描け

るのかといえば、それはやはり困難なことだといわざるを得ないだろう。

二〇年前に刊行された『部落史研究ハンドブック』（小林茂・秋定嘉和編、雄山閣出版、一九八九年）は、本シリーズと同じような趣旨で編まれたものだが、前近代についてみれば「古代・中世の研究状況」（青盛透）、「『部落』起源論研究の状況」（寺木伸明）、「近世中・後期の研究状況」（安達五男）という構成で、加えて時代を問わない分野史としてあげられた八テーマのうち、「民衆史」（生瀬克己）、「経済史」（小林茂）、「宗教史」（山本尚友）、「文化史・芸能史」（川嶋将生）、「地域史」（尾崎行也）が前近代に言及している。

時代ごとの総論的な項目と、分野史をいくつか並列すればそれで部落史研究のおおよその全体像がつかめるといえるのがこの頃の研究状況であったといえるだろう。それに比して、現在の研究状況の中で同様のテーマ配列で部落史研究の見取図が描けるのかといえば、それもまた不可能事だろう。

それほどに部落史研究（とその隣接分野）の全体像を把握することが困難になっているのが、研究の現状なのだ。

それにはいくつもの要因をあげることが出来るだろうが、一つには歴史学研究が大きな物語を喪失してしまったということがあげられるだろう。そして、マルクス主義歴史学の失効と並行して進行した「部落史の見直し」と総称されるような研究視角の大転換があり、さらに、そもそも「部落差別」とは何かということについての理解の多様化（混迷？）が、部落問題の現状にも影響されながら生じた。

かつての前近代部落史研究は、前近代身分制研究の一分野を構成していたから、そこでは「差別」とは身分の上下とほぼ同義であり、そのことは疑われようもなかった。しかし、現状では「穢多」なる存在が制度上の身分であるか否かといった点も含めて自明のこととはできなくなった。筆者の感覚でいえば、自身の作業の課程で「身分」とか「身分制」（身分的周縁論も含めて）といったものを意識することはまずない。意識しているとすれば、それは「差別」（曖昧な概念なので「賤視」、「蔑視」等と言い換えてもいいが）である。

第二には、容易に内容を把握しがたい程に各地域の研究が進展したことだろう。その中で、江戸時代の穢多村の実態について地域偏

差が極めて大きいことが浮き彫りになった。すでに指摘されてきた東西の大きな差違だけではなく、例えば同じ畿内においても摂津・河内・和泉・山城・大和それぞれに共通性とともに偏差が存在し、さらに同じ大和国内においても地域ごとに偏差が存在する。益地部と山間部、草場権益を持つ村と持たない村、草場関連産業の発達によつて都市的変貌を遂げた村とそうはならなかった村、地域的な偏差だけでなく、個々の村が経過してきた歴史的なあゆみによつて生じた偏差も相当大きいことを前提としないと、江戸時代の穢多村に関する何程かを発言することは困難になっている。

さらに、そうした地域史研究の進展の中で、前近代の身分制の最底辺、あるいは社会の最底辺におかれたといった従来のイメージでは到底理解不能な穢多村の実態が次々と明らかにされたことがあげられる。大和国に限ってみても周辺の百姓村と大差ない土地を所持し、農業に従事し、年貢納入の義務を負い、水利権や入会権を持ち、経済的にも安定しているという、その部分だけをみれば百姓村と全く変わらない様相を呈しているが、草場権益を所持し、寺社の法

要や祭礼で特異な役割を果たし、人別では「穢多」として把握され、周辺の百姓村からは「異なる存在」とみなされるという江戸時代の穢多村の姿が明らかになった。しかも、こうした穢多村の中から草場関連産業の発達によつて、人口が急増し、狭隘な家屋の密集、非農業従事者の圧倒的増加という近代の部落問題の前提となるような実態をみせる集落が生まれてくるのである。

もちろん大和国の事例がそのまま他国に適用できるわけではなく、ここでも先に触れた地域偏差が問題とされなければならぬが、こうした部落の実態までをも過不足なく説明可能なものとしての部落史像の提示が求められているのだが、それは身分制論でも、身分的周縁論でも、また「生産と労働」のいずれでもないだろう。

身分制論や身分的周縁論は、どのような結論が用意されようと、所詮は諸身分の中における穢多やその他の被差別民の身分としての配置を問う作業に過ぎないだろうし、「生産と労働」論についていえば、そもそも何のために部落の生産や労働について明らかにする必要があるのかという根本的な点が明確でない。穢多村における皮

革や履き物生産の様態を「中世的ギルドの形態」とか「マニユファクチュア段階」とかラベリングしたところで、そのこと自体に何か意味があるとは思えないのである。近世の穢多村がそのような経済構造をもつたことが、他の百姓村に比して何をもたらすことになったのか、さらにはそのことによつて周辺地域社会の穢多村に対するまなざしにどのような影響を及ぼしたのか、「生産と労働」論は、例えばそのような議論をすることによつてはじめて一定の意味を持つだろう。

総じて穢多村や多様な被差別民の経済・生活・文化等々のあれやこれやを明らかにすること、それ自体に意味があるとは思えない。部落差別とは何であり、どのように生成されたものであるのか、その解決のためには何が必要か、そのようなことを明らかにしていく一助となつてはじめて個々の議論は何らかの意味をもつことになるだろう。

そのようなものとして研究をあらためて再構築していくことが必要な段階に、部落史研究は至つていないのではないだろうか。

（部落解放・人権研究所刊、〇九年三月、三〇〇〇円）

本の紹介

山本尚友著 『史料で読む部落史』

吉田栄治郎

(天理大学講師)

本書は著者の二冊目の単著であり、帯の言葉を借用すれば「古代から江戸時代までの被差別部落の歴史を文書と絵巻でひもとく」とをめざした被差別民史である。

著者は本書刊行の意図を、「だれも実際には部落も部落民も知らないこと」が「被差別部落に対する誤った見方」を根絶させられない要因になっている、「このような状況をすこしでも改善する」ため、「一人でも多くの人が実際の部落そして部落民と出会う機会を持つことが必要なのだが、そうした機会が持てない人々にせめて「被差別部落の実像にせまる一歩」に取りまといたいと思ひ立ち、本書

たしかに、部落解放運動・同和行政・同和教育・同和啓発は、それが社会に広く深く浸透することが可能になるだけの時間を確保して、部落や部落民に関する大量の科学的な情報を発信し続け、少な

1

2

くとも公の場ではそれが共有される状況まで作り出すことに成功した。しかし、非部落民としてのアイデンティティを確かめ続けるのがいやになるような質問（「はじめに」）を発する所以である。部落への旧態依然のイメージ、つまり発信され続けてきた大量の情報を貧困なものとして貶る、非部落民が部落と部落民に抱く妄想は相変わらず残り、先の情報はその在処についてたどり着けなかつたし、当然その解体に手を付けることはできなかつたということなのだろ。

したがって、大量に発し続けられてきた科学的な情報によって隠され、見えにくくなつてしまつたが、そうした情報がほぼ共通して描き出す部落と部落民像とはかなり異質の、部落と部落民の原像とでもいふべき何かがあるに違いないとの確信を執拗に抱き続ける非部落民を今なお少なからず残すことになつた。「いちいち答えるのがいやになるような質問」はそのようにして残つた人々の持つ確信

に根ざしたものであり、それは発信されてきた情報が貧困ではないこと、非部落民の描く部落と部落民の原像が根拠を持たないことをどれほど科学的に、精緻に証明し、それに基づいて教育・啓発を繰り返したとしても根絶、あるいは雲散霧消させることができないようである。

多くの非部落民に自身が描く部落と部落民の原像は妄想にすぎず、真の部落と部落民像は別にあるのだと信じ込ませることは、神を信じる者に神の不在証明を受け入れさせようとすることと同じほど困難な事業であり、右の教育・啓発は不可能を前提とした試行だったのかもしれない。なぜなら、妄想は非科学的だったからであり、妄想を放棄させるにはたとえ別の妄想を用意するといふ非常手段こそが有効ではないかと思つ時があつたほどだが、一つの神を信じる者に別の神を用意したとしても神の不在証明は届くはずはないと断念したことがある。

著者はそうした部落と部落民とを取り巻く困難な状況を熟知し、妄想の手強さ、愚かさも十分に承知した上で、その在処にまでたどり着き、それに手を付ける方法を探し出そうと、長い間史料はむろん現実とも格闘し続けてきた研究者の一人である。したがって本書は、右のすべてを呑み込んだ上、妄想が妄想にすぎないことを精緻

に証明することにより、「一人でも多くの人が実際の部落そして部落民と出会う機会を持つて、被差別部落の実像にせまる一歩」にしてみらいたいと思ひ立ち、京都・奈良を中心に多様な被差別民の歴史をあえて平易な文を重ねながら取りまとめた歴史書、ということになるうか。

ここで本書の構成を示しておこう。

- はじめに (7～9頁)
- 一 古代社会の動揺がもたらしたもの (10～39頁)
- 二 穢れの清めと非人身分の成立 (40～62頁)
- 三 中世前期の非人 (63～106頁)
- 四 中世後期の社会変容と非人 (107～137頁)
- 五 中世から近世へ (108～175頁)
- 六 江戸時代の穢多・非人の生活 (176～203頁)
- おわりに (204～211頁)

本書の叙述は江戸時代で終わり、明治時代以降にはほとんど言及していないが、これは続編が予定されているためなのか、著者の関心が近世以前に集中しているためなのか、あるいは現在まで続く部落差別の本質を近世以前の社会にあつた何かに発見しているためなのか、いずれとも定かではないが、あえて忖度すれば初項なのかと思つ。

とすれば我々にはそう遠くない将来「被差別部落の実像にせまる一歩」に成りうる別の一書に接する機会が与えられることになる。期待しておきたい。

3

本書の内容に入っていくたい。書評の通例にしたがって本書の要旨を紹介していくが、与えられた紙幅に限りがあるため、疑問を抱いた点などをあわせて指摘していくことにしたい。

一では部落の生成を古代律令体制が解体に向かう平安時代に求めている。その末期に社会的弱者として非人と呼ばれる集団が発生し、その内部が罪人・乞食・宿・散所・穢多という五集団に分かれたという(13～14頁)。かつて支配的だった非人宿分解論とは分解の時期や非人宿も並立する集団の一つと見る点でややニューアンスは異なるものの、いわば被差別集団モノコト又発生論である。これは三宅米吉編『以文会筆記抄』の悲田院に関する記述に一致するものであり、実証の困難さが桎梏になるとしてもさしあたっては首肯しうる論である。

また、穢れの問題にも言及し、それには物理的な汚れだけではなく、死・誕生・月経時など共同体の脅威となる「不安定な時間」も含まれるという(23～24頁)。「不安定な時間」とはややわかりにく

い表現だが、それがメアリー・ダグラスの「場違い」論の援用だとすれば、ダグラスも気づき、その後文化人類学が主になって深化させていった穢れの両義性を丁寧に論じる必要があるように思うが、本書ではそれを「原始的な社会」段階に見られるものと限定し、政治と宗教が分離した社会では宗教的な禁忌「否定的なものとしてのみ残ると指摘するに止まり(24頁)、それ以降の追究は行わない。歴史学的にはそのように整理するだけでよいとしても、そこに止まる限り「いちいち答えるのがいやになるような質問」は「いちいち答えるのがいやになるような質問」として繰り返されることになる。

評者は、非部落民の抱く部落と部落民の原像はそれと気づかないまま穢れの両義性を内在させているからこそ容易く雲霧消させられないのではないかと考えているが、「原始的な社会」段階のものに止めず、その後の社会にも残されるものとして、そのありようについて議論を重ねる必要があるように思えた。

二は平安から鎌倉時代の非人論であり、非人研究のエッセンスを整理した上で丁寧に取りまとめたものである。多くが首肯できるものだが、非人宿の「世話役」(51頁)の説明が平板に流れたためその発生経緯がクリアーに示されないことは残念だった。「世話役」とは

非人宿長吏とその配下集団を指していると思うが、寛元二年(一二二四)の奈良坂・清水坂両非人相論文書(「古文書雑纂」分)に「清水坂之当長吏者為清水寺之僧天清水寺爾候志加土母」とある清水坂長吏や、伊賀国黒田荘に所在した非人宿長吏に関する新井孝重氏の仮説(「住民の精神生活」、『東大寺領黒田荘の研究』所収)などをふまえ、妄想を断ち切るためさらに踏み込んだ分析を試みて欲しかった。

三では宿・散所・千秋万歳・陰陽師・穢多など個別被差別民の鎌倉から室町時代のありようを、著者が編纂にかかわった『京都の部落史』の成果をふまえて丁寧に描き出しているが、著者の本領であり、読み応えのある章になっている。ただ、奈良をフィールドにする評者の望蜀の思いから来るものだが若干の不満を抱く点がある。本書の性格から細部にわたりすぎるとのそしりを受けることは承知の上だが、73～74頁に引用された本書では文和三年(一一三四)とする「大乘院文書冊子本三十一」中の「衆徒僉議度申引付」の扱いである。

これは欠年文書であり年次特定がかなり難しいものだが、荻野三七彦編『大乘院文書の解題的研究と目録』では記事中に閏一〇月があることや、「応永十年歟」との貼紙が見えることから正平九年(文和三年=一一三四)か明德三年(一一

九二)と考えたようであり、本書はその判断にしたがっているようである。しかし、その後安田次郎氏が「奈良の南市について」(石井進編『中世をひるげる』所収)において、記事に現れる公文目代・通目代が建武二年(一一三五)前後に任命されていることや同年にも閏一〇月があることから建武二年の記事と判断し、「成算堂文庫(建武二年)興福寺大乘院奉行引付」(『史苑』58巻2号)にもそれが引き継がれ、研究史の共有するところとなっている。

また、墓間宿に荷担して北山非人に矢を射かけた「彼近辺」の三ヶ所の輩について、本書では「西坊城・河西・箸谷」と読み、いずれも非人宿とするが、「箸谷」は『奈良の部落史』の読みであり、「成算堂文庫(建武二年)興福寺大乘院奉行引付」では「西坊城・河西・箸喰」と読んでいる。西坊城・河西(川西)に接する集落に箸喰があることで「成算堂文庫(建武二年)興福寺大乘院奉行引付」を正読としなければならぬものであり、著者のフィールドではないためやむをえないとしても、研究史への十分な目配りをして欲しかった。

四では、三に登場する非人が社寺・武家などの権門との強く関係を持ったのに対し、室町時代後期に現れる三味聖・鉢叩きが、そのころ京都に登場した都市民の生活にかかわる需要から発生したもの

とし、非人集団生成の契機等に大きな違いが生まれていたことを指摘する(109頁)。また、葬送を担当した三昧聖の生成過程を二点の『東寺文書』を使って丁寧に取りまとめているが(124、128頁)、ともに大変興味深く、教えられるところが多かった。

五では中近世移行期を取り上げているが、穢多や散所住人である声聞師が京都・奈良から地方に移住・拡大していったことを指摘する(139、141頁)。柳田国男の「方言周囲論」に類似した論だが、「方言周囲論」に対する「方言孤立変遷論」(金田一春彦)が成立するか否かは別に、被差別民モノコース発生論を横に広げたと読み取れる本書の論については、穢れ觀念の発生史に関する議論を含め、マルチコース発生論を対置しつつ議論を深める必要があるように思えた。

六では江戸時代の穢多・非人に限定し、研究史をふまえつつ、穢多については支配・役・生業・宗教生活、非人についても支配・役・生活を丁寧に概観している。多くに異論はないが、一つは「穢多の支配と役儀」(178、179頁)、もう一つは「農業」(186、189頁)の項について、大和をフィールドにする筆者にはやや腑に落ちない点があった。

まず、「穢多の支配と役儀」だが、本書では百姓村内部の身分編

成が「庄屋 年寄 組頭 本百姓 水呑百姓」であったのに対し、穢多村では「年寄 組頭 役屋 役を負担しない家」であり、そこに違いが見えるという。百姓村についてはむしろ異論はないが穢多村についてあえて百姓村とは異なる村内身分編成を提示する意味がよくわからない。役屋「本百姓、役を負担しない家」「水呑百姓では当然ない。なぜなら、「役屋

役を負担しない家」の役は百姓役ではなく穢多役なのだから、穢多村の「年寄 組頭」とは別の編成原理によるものであって、穢多村「年寄 組頭」の下には「役屋 役を負担しない家」が付くのではなく当然本百姓 水呑百姓が位置づけられるためである。百姓村・穢多村の本百姓が本田畑を所持して百姓役を負担するのに対し、穢多村の役屋が草場株を持つて穢多役を負担するという構図が想定できると、著者も別の箇所ではそのように推測している(179頁)。さらに「穢多としての役儀に直接関わらないことは、本郷を通じて領主に申し出る」(179頁)とも述べているので、著者も百姓村の編成原理が穢多村にも適用され、穢多村もまた「年寄 組頭 本百姓 水呑百姓」に編成されたと考えているのではないか。大和の穢多村では百姓村と同一の村内編成が行われていたことは明らかだが、論理的には他国・他領においてもそれ以

外の編成原理は想定できないように思う。

次いで穢多村の農地に関する箇所である。これは本書に限ったものではなく、部落史に関する論文には多少なりとも穢多村の農地が少ないという記述が見られるのだが、何を言わんとしているのかがよくわからなかった。一般に穢多村の村領域が狭く、村高が少ないという意味だとすれば、多くが枝郷である穢多村の村領域を正確に知ることは困難であり、そもそも枝郷穢多村と百姓村との比較はできないはずである。独立村に限った指摘だとすれば、大和では一〇〇石に満たない百姓村も多数あり、なかには五〇石程度の村もある一方、一五〇石をこえる独立の穢多村もあって、独立した穢多村の領域だけがとりわけ狭いということでは想定できない。また、そうしたことはなく、穢多村住人の所持する田畑が一般的に少ないという意味なら、本書で取り上げた丹波国何鹿郡志賀村の場合、延宝六年(一六七八)「検地帳」時点で九〇石、三三石、二〇石の所持高を持つ次郎八・助三郎・小左衛門がいるし、大和でも穢多村住人の所持高が周辺百姓を凌駕する例はたくさんある。志賀村を例外とし、他の穢多村百姓は零細だというのは、例外的な志賀村ではなく零細所持者の多いという他の穢多村

を例として引くべきではなかった

ろうか。

「おわりに」では宿(夙)・鉢叩き・陰陽師の由緒獲得を目指す動き、穢多に対する異種視が異人種視へ転換する過程と論理、穢多村寺院僧侶の本願寺内部での上昇を目指す動きなどを取り上げているが、いずれも興味深く読むことができた。ただ、宿(夙)について近世中期にすでに新羅・百済の人間に発するとの論があるので(享保二一年一七三六 版行『奈良坊目拙解』)、穢多の異人種論の発生が近世後期に経済力の伸張や平人との交際の機会が広がったことに求められるかどうかには議論の余地があるように思えた。

4

こうした書のとおりまとめが困難であることは、評者も以前の職場(奈良県立同和問題関係史料センター)で『奈良の被差別民衆史』の編纂にかかわったため十分に知っており、かつ本書編纂の意図をのよりに読み取りながら、随所に十分な解釈を重ねた上で失礼な言葉を連ねてきたことを著者にお詫びしておきたい。著者が妄想の在処を探すことに折に触れ関心を示されていることに甘えた所為として看過していただけたものと思うが、重ねてご寛容をお願いしながら小論を閉じることにしたい。

(現代書館刊、〇九年三月、二二〇〇円)

部落解放研究 186 (部落解放・人権研究所刊, 2009.7) : 1,000円

特集 子どもの貧困・差別と学力問題

子どもの貧困と学力問題 人権教育としての同和教育の視座から 桂正孝 / 部落の低学力 近年の調査からみえてくるもの 高田一宏

資料紹介 PISA調査における日本国内の学力格差問題 若槻健

和泉市の地域就労支援事業の始まりと今後の課題 山野正広

イングランド公立学校における拡張サービスの運営と戦略 ハヤシザキ カズヒコ/レイチェル・ウィンター

社会的包摂とキーコンピテンシー KC2008国際会議の報告を含めて 赤尾勝己

書評 森戸英幸・水町勇一郎編著『差別禁止法の新展開 ダイヴァーシティの実現を目指して』金子匡良

部落解放ひろしま 85号 (部落解放同盟広島県連合会刊, 2009.7) : 1,000円

特集 県連再建40周年 新たな歩みを

インタビュー 小森龍邦県連顧問 県連再建40周年と解放運動の展望

解放運動の人間像 26 解放理論の創造を誠実に取り組もう 小森龍邦

部落史研究報告集 第13集 (八幡浜部落史研究会刊, 2009.6)

神宮通り子ども会のあゆみ 2 菊池正

吉森英樹くんを偲ぶ

「宿神信仰と被差別民」資料～「かわた」を中心に～ 水本正人

愛媛の部落史の掘り起こし～八幡浜部落史研究会「オランオラン」の歩み～ 五藤孝人

部落問題研究 189 (部落問題研究所刊, 2009.6) : 2,187円

第46回部落問題研究者全国集会報告

部落問題解決理論の史的考察 広川禎秀

歴史1分科会

中世における社会集団の編成原理 大山喬平氏の中世社会論を検討する 三枝暁子 / 社会的分業関係と身分的序列関係 大山喬平氏の「ゆるやかなカースト社会」論によせて 小谷汪之 / 二、三の弁明 三枝・小谷両氏の報告に接して 大山喬平

歴史2分科会

部落解放全国委員会の運動 西尾泰広 / 部落問題研究所の成立 竹末勤

現状分析・理論分科会

部落問題とはいかなる基本的人権か 村下博 / 大津市における同和行政終結の取り組み 見直し、事業完了報告会 (完了祭) 川嶋重信 / 岡山における地域人権運動の現状と課題 中島純男

教育分科会

新学習指導要領における学力観 マクロな面とミクロな面をつなぐ批判的分析 市川純夫 / 主権者を育てる社会科の授業 新しいシティズンシップ教育をめざして

杉浦真理

文芸分科会

戦後日本の思想状況と部落問題の動向 成澤榮壽 / 部落問題解決過程における文芸の研究 秦重雄

ライツ 123 (鳥取市人権情報センター刊, 2009.8)

今月のいちおし!! 『性虐待の父に育てられた少女 甦生への道』 (川平那木著) 田中澄代

ライツ 124 (鳥取市人権情報センター刊, 2009.9)

今月のいちおし!! 『それ、恋愛じゃなくてDVです』 (瀧田信之著) 福壽みどり

リージョナル 11 (奈良県立同和問題関係史料センター刊, 2009.6)

郡山城の「御殿」「五軒屋敷」について 藤本仁文

「奈良県風俗誌」からみたムラの制裁 津浦和久

史料紹介 「靖軒中尾先生行状」 奥本武裕

部落差別に関する覚書 1 吉田栄治郎

りべらしおん 36 (福岡県人権研究所刊, 2009.7)

福岡県立花町連続差別八ガキ事件「犯人」逮捕についての見解 森山沾一

リベラシオン 134 (福岡県人権研究所刊, 2009.6) : 1,000円

特集 部落差別と市民啓発

民衆史こぼれ話 片隅に生きた人たち 1 「こや」という女性の生涯 宗像郡地島 石瀧豊美

席田・月隈の社会運動と生活 4 金山登郎

近世民衆史の泉 55 古文書学習会

図書紹介

『そして僕らはエイズになった』 (石田吉明・小西熱子著) 宇野哲哉 / 『福岡県庁の風に吹かれて われらが日々』 (松田初善著) 森山沾一

歴史評論 712 (歴史科学協議会編, 2009.8) : 770円

戦前期都市社会政策と内鮮融和団体の形成と崩壊 京都市における内鮮融和団体を事例として 杉本弘幸

和歌山人権研究所紀要 3号 (和歌山人権研究所刊, 2009.6) : 500円

宗教による戦争と差別の肯定 浄土真宗における「真俗二諦思想」 神戸修

ハンセン病問題と和歌山県 近代の湯の峰温泉をめぐる 矢野治世美

和歌山の部落史研究文献目録2の解説 藤井寿一

和歌山の部落史研究文献目録2 書籍の部 (1981年1月～90年12月), 論文の部 (1981年1月～90年12月)

和歌山の部落史編纂会だより 3号 (和歌山の部落史編纂会刊, 2009.3)

岡嶋かわた村の村定に関する若干の考察 「村法」と「新法」 安竹貴彦

高野山「谷之者」研究の現状と課題 藤井寿一

再び兵庫の部落史に学ぶ 7 徳川検地（延宝検地）と近世部落の成立 撰津国川辺郡猪名川流域の部落史 安達五男

本の紹介

『高校を生きるニューカマー 大阪府立高校にみる教育支援』（志水宏吉著）辻本久夫 / 『官製ワーキングプア 自治体の非正規雇用と民間委託』（布施哲也著）橋本貴美男 / 『反貧困 「すべり台社会」からの脱出』（湯浅誠著）竹本貞雄

[ひょうご部落解放・人権研究所] 研究紀要 15号（ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2009.3）: 1,000円

部落解放教育をめぐるエトスの研究 2 笹倉千佳弘・井上寿美・齋藤尚志

清野長太郎県政と社会政策 高木伸夫

史料紹介 兵庫県融和運動史関連新聞記事集成 1 1922（大正11）～1923（大正12）年 高木伸夫

部落解放 616号（解放出版社刊, 2009.7）: 630円

特集 差別の現在 差別論の諸相

「だまし舟」の差別論 八木晃介 / <ポスト同対法体制>の構想にむけて 三浦耕吉郎 / カテゴリー化をいま一度見直す 他者をつなぐために 好井裕明 / 差別論の課題 偏見理論パラダイムを超えて 佐藤裕 / 見ようとしているか/聴こうとしているか 問い直す「ジェンダー視点」 井桁碧

本の紹介

『大阪空襲訴訟を知っていますか 置き去りにされた民間の戦争被害者』（矢野宏著） / 『戦争を止めたい フォトジャーナリストの見る世界』（豊田直巳著） / 『官製貧困社会 自治体の困惑と市民の困窮』（布施哲也著） / 『蘇る巨人 喜田貞吉と部落問題』（塩見鮮一郎著） / 『発達障害は少年事件を引き起こさない 「関係の貧困」と「個人責任化」のゆくえ』（高岡健著） / 『サラムの在りか』（丁章著）

パリを踏んだ三番壱 被差別民の多様な文化遺産を守る作業は世界の課題 辻本一英

鶴田知也「コシャマイン記」断章 小正路淑泰

子どもたちの未来に投資する 里親24年の坂本さん夫妻 神林毅彦

部落・差別の歴史 そのとらえ直しと論点 17 第3章近世における社会的地位 2 寺院・仏教と被差別部落の関係を考える 藤沢靖介

部落解放 617号（解放出版社刊, 2009.7）: 1,050円

第35回部落解放文学賞

部落解放 618号（解放出版社刊, 2009.8）: 630円

特集 部落問題と向きあう若者たち

若い子に伝えたいことがある 石井眞澄・石井千晶 聞き手 内田龍史 / 出会いからエネルギーが湧いてくる 「阿賀ルネサンス」に学んだ私の解放運動 川崎那恵 / 違和感からライフワークへ 上川多実 聞き手 内田龍史 / 部

落問題を語ることの困難とその可能性 内田龍史 本の紹介

『差別と日本人』（野中広務・辛淑玉著）角岡伸彦 / 『部落史研究からの発信 第1巻 前近代編』（寺木伸明・中尾健次編著）奥本武裕

部落・差別の歴史 そのとらえ直しと論点 18 第3章 近世における社会的地位 3 さまざまな宗教者と幕府の政策、近世の変化 藤沢靖介

部落解放 619号（解放出版社刊, 2009.9）: 630円

特集 戦争と障害者

本の紹介 『部落史研究からの発信 第2巻 近代編』（黒川みどり編著）高木伸夫

資料 「立花町連続差別八ガキ事件犯人逮捕」について 第1次見解とお詫び 部落解放同盟福岡県連合会, 部落解放同盟筑後地区協議会

対談 『カムイ伝』からみえる世界 上 近世社会の産業・文化と現代をとらえる視点 田中優子, 中尾健次

部落解放 620号（解放出版社刊, 2009.10）: 630円

特集 日本の先住民族

アイヌ民族の現状と課題 萱野志朗 / 歴史からみたアイヌ民族 小林よしのり氏の「アイヌ民族」否定論を批判する 榎森進 / 先住民族、琉球人の自治に向けて 松島泰勝

人種と階級 アメリカが抱える複雑 神林毅彦

本の紹介

『部落史研究からの発信 第3巻 現代編』（友永健三・渡辺俊雄編著）小島伸豊 / 『被差別民の長崎・学 貿易とキリシタンと被差別部落』（阿南重幸編著） / 『アジア・太平洋人権レビュー2009 女性の人権の視点から見る国際結婚』（アジア・太平洋人権情報センター編） / 『ゆびさきの宇宙 福島智・盲ろうを生きて』（生井久美子著） / 『とことん！部落問題』（角岡伸彦著） / 『裁判員時代にみる狭山事件』（菅野良司著） / 『戦争の時代ですよ！ 若者たちと見る国策紙芝居の世界』（鈴木常勝著）

若年層、高齢層の課題が明確に 女性実態調査にとりくんで 部落解放同盟大阪府連合会女性部

鈴木祥蔵先生、ありがとうございました 山中多美男

問われる日本の人身売買 人身売買に関する国連特別報告者の日本公式訪問 原由利子

ディアスポラとしてのオバマ マジョリティとマイノリティの垣根を越える新しい中心 朴育美

「これからの人」の死 マイケル・ジャクソンと人種差別 藤田正

フィリピン、ムスリム社会の貧困と海賊 高橋樹人

対談 『カムイ伝』からみえる世界 下 近世社会の産業・文化と現代をとらえる視点 田中優子, 中尾健次

部落・差別の歴史 そのとらえ直しと論点 19 第3章 近世における社会的地位 4 地域社会と、被差別部落の集団的性格 藤沢靖介

- ちくま 461 (筑摩書房刊, 2009.8) : 100円
 青春の光芒 異才・高橋貞樹の生涯 27 第7章 『特殊部落一千年史』をめぐって 2 沖浦和光
- ちくま 462 (筑摩書房刊, 2009.9) : 100円
 青春の光芒 異才・高橋貞樹の生涯 28 第7章 『特殊部落一千年史』をめぐって 3 沖浦和光
- であい 567 (全国同和教育研究協議会編, 2009.6) : 150円
 人権文化を拓く 144 「にくのひと」を制作して 満若勇咲
- であい 568 (全国人権教育研究協議会刊, 2009.7) : 150円
 人権文化を拓く 145 共に働く学校、いつになったら? 嶺井正也
- であい 569 (全国人権教育研究協議会刊, 2009.8) : 150円
 人権のまちをゆく 46 リーマンショック後の釜ヶ崎を歩けば ありむら潜
- 人権文化を拓く 146 「水俣の怒り」に触れて「人」を知る 坂西卓郎
- 鳥取県部落史研究会のあゆみ 8 (鳥取県部落史研究会刊, 2009.3)
- 鳥取県部落史研究の現状と課題～資料集編さんのための準備作業として～ 西村芳将
- 鳥取藩における非人～谷非人の歴史的変化～ 堀江駿
- 私と解放運動 原満義
- 近現代日本における「差別の連鎖」 国民国家論、ポスト・コロニアリズム の視点から 一盛真
- どの子ども伸びる 405 (どの子ども伸びる研究会刊, 2009.7) : 735円
 「人権教育」批判 「人権教育 = 道徳教育」の問題 谷口幸男
- どの子ども伸びる 406 (どの子ども伸びる研究会刊, 2009.8) : 735円
 「人権教育」批判 画一化される「人権教育」 谷口幸男
- どの子ども伸びる 407 (どの子ども伸びる研究会刊, 2009.9) : 735円
 「人権教育」批判 強められる「部落問題学習」 谷口幸男
- どの子ども伸びる 408 (どの子ども伸びる研究会刊, 2009.10) : 735円
 「人権教育」批判 「参加型体験学習」の問題 谷口幸男
- ねっとわーく京都 247 (ねっとわーく京都21刊, 2009.8) : 500円
 同和行政レポート 「ここは部落ですか」と聞くのは差別なのか 東近江市の抵抗と暴走 寺園敦史
- ねっとわーく京都 248 (ねっとわーく京都21刊, 2009.9) : 500円
 特集 市同和行政の到達点と課題
 同和「総点検委員会報告」をどうみるか 井坂市会議員
- に現段階での到達点と今後の課題を聞く / 「密室談合型行政」の終焉～リム ボンさんインタビュー～ 総点検委員会「報告書」で言いたかったこと 聞き手・寺園敦史
- ねっとわーく京都 249 (ねっとわーく京都21刊, 2009.10) : 500円
 同和行政の到達点と今後の課題 小村和義・中村和雄
 同和レポート 「差別」の強調は不信と反発を招く 「同和啓発」で方針転換はじめた京都市 寺園敦史
 花園大学文学部研究紀要 41号 (花園大学文学部刊, 2009.3)
- 十五年戦争期における京大図書館の史的考察 廣庭基介
 はらっぱ 297 (子ども情報研究センター刊, 2009.7)
 特集 「保育」の労働条件を考える
- はらっぱ 298 (子ども情報研究センター刊, 2009.8)
 特集 『相談』1 する側の思い、したあとの気持ち
- はらっぱ 299 (子ども情報研究センター刊, 2009.9)
 特集 『相談』2 相談を受けるということ
- 鈴木祥蔵先生ご逝去を悼む 祥蔵先生からのいただきものを、次へ 田中文字子
- ヒューマンJournal 189 (自由同和会中央本部刊, 2009.6) : 500円
 融和運動の再評価 5話 階級的な水平運動の弊害 宮崎学
 ヒューマンJournal 190 (自由同和会中央本部刊, 2009.9)
- 「立花町の差別ハガキ事件」について 自由同和会の声明
- 融和運動の再評価 6話 土着の社会改良 留岡幸助のこと 宮崎学
- ヒューマンライツ 256 (部落解放・人権研究所刊, 2009.7) : 525円
 インタビュー 「新型インフルエンザ」騒動とはいったい何なのか 村岡潔教授に聞く
- 14年の歳月をかけて『大阪の部落史』完結
 グローカルな視点 全10巻完結記念講演会、開かれる 渡辺俊雄 / 編纂事業に携わって 崎谷裕樹 / 差別の歴史に新たな光 『大阪の部落史』全10巻を鳥瞰 佐々木泰造
 書評 山森亮 『ベーシック・インカム入門』 亀山俊朗
 ヒューマンライツ 257 (部落解放・人権研究所刊, 2009.8) : 525円
 書評 黒川みどり・藤野豊編 『近現代部落史 再編される差別の構造』 新たな試みの魅力的な通史 吉村智博
 ヒューマンライツ 258 (部落解放・人権研究所刊, 2009.9) : 525円
- 走りながら考える 101 土地差別調査事件が示す差別の実相 厳然と存在する部落差別 北口末広
- ひょうご部落解放 133 (ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2009.6) : 700円
 特集 それぞれの顔、それぞれの現在 今を生きる青年たち

- 川太郎先生の教育研究の仕事と思い出 桑原律
季刊「人権問題」の総目次 第13号～16号
真宗 1266号（真宗大谷派刊，2009.9）：250円
真宗大谷派における部落差別問題実態調査 調査のまとめ
信州農村開発史研究所報 106・107号（信州農村開発史研究所刊，2009.3）
「長野県部落問題関係記事概要」こぼれ話 2 水平社を支援した警察署長・両角平左衛門は敬虔なキリスト者であった 川向秀武
長野県人権政策審議会答申に思う 同時に問われる私たち 高橋典男
信州農村開発史研究所報 108号（信州農村開発史研究所刊，2009.6）
「鎌の時代」（大石慎三郎）とは
小諸・「学校場」のこと
信州農村開発史研究所報 109号（信州農村開発史研究所刊，2009.9）
信州農村開発史研究所創立30年記念特集
佐久の人々にムラの誇りとロマンを 川向秀武 / 30年にあたり、これまでの活動をふりかえる / 信州農村開発史研究所の構成 / なぜ設立されたのか
身同 29号（真宗大谷派刊，2009.7）：1,000円
大谷派における解放運動の歴史と課題
武内了温師を憶う 泉恵機 / 戦時期の大谷派真身会と武内了温 朝治武 / 朝野温知（李壽龍）さんの歩み 戦前の著述を中心に 水野直樹 / その原動力とは 「真宗大谷派における部落差別問題実態調査」報告書作成を終えて 阪本仁 / 部落差別問題の克服を願いとして これまでの教訓を生かして真の解放を 浜口安宏
「変成男子」試論 東方浄土の女性たち 土屋慶史
真宗大谷派におけるハンセン病問題に関する真相究明に向けて 3 本多惠孝の論考に関する備忘 訓覇浩
「死刑を止めよう」宗教者ネットワークの活動報告 雨森慶為
司法保護の先覚・寺永法専師について 山内小夜子
図書紹介 八木晃介著『<癒し>としての差別 ヒト社会の身体と関係の社会学』吉田佑樹
月刊スティグマ 157号（千葉県人権啓発センター刊，2009.7）：500円
明治維新後遺症としての日本人…差別問題をすべての人のものにするための試論 2 鎌田行平
月刊スティグマ 158号（千葉県人権啓発センター刊，2009.8）：500円
部落解放運動と差別のボーダレス化 部落解放同盟千葉県連合会第33回定期大会議案書より
明治維新後遺症としての日本人…差別問題をすべての人のものにするための試論 3 前近代日本の「宇宙観」（コスモロジー） 鎌田行平
世界人権宣言大阪連絡会議ニュース 324（世界人権宣言大阪連絡会議刊，2009.8）：100円
部落女性たちの現在～部落解放同盟大阪府連合会女性部実態調査から見えてきたもの～ 鶴岡弘美
世界人権問題研究センター研究紀要 14号（世界人権問題研究センター刊，2009.3）：2,500円
退去強制をめぐる日本の裁判例と人権条約 村上正直
広島型融和運動の成立 広島県地方改善委員会における山本正男の経験 手島一雄
菱野貞次と京都市政 1929～1933年（下） 白木正俊
尹東柱のいた頃の同志社 仲尾宏
アジア・太平洋戦争下、神戸港における朝鮮人・中国人・連合国軍捕虜の強制連行・強制労働 飛田雄一
戦前期京都市西陣地区の朝鮮人労働者 高野昭雄
靖国神社問題を考える 学生のアンケート調査からみえる倒錯した時代状況 源淳子
多重化するICTにおけるジェンダー格差～国際比較から～ 國信潤子
資料目録 門田秀夫氏寄贈資料目録 1
地域と人権 1078号（全国地域人権運動総連合刊，2009.7.15）：150円
「同和独裁」 寺園敦史氏東近江市議会傍聴ブログ
地域と人権 1080号（全国地域人権運動総連合刊，2009.9.15）：150円
福岡・立花町連続「差別」ハガキ捏造劇の波紋
月刊地域と人権 305（全国地域人権運動総連合刊，2009.7）：350円
封建的遺制である「身元保証書」の廃止を 丹波正史
岡山の住宅問題要求交渉 中島純男
月刊地域と人権 306（全国地域人権運動総連合刊，2009.8）：350円
第5回地域人権問題全国研究集会報告
そもそも部落・同和問題とは、それが解決された状態とは 丹波正史 / 鳥取県内における同和問題の現状と課題 田中克美
申し入れ 同和偏重の人権教育・啓発の抜本的見直しを求める 立花町匿名連続はがき事件にかかわる提言
月刊地域と人権 307（全国地域人権運動総連合刊，2009.9）：350円
資料 角川ONEテーマ21『差別と日本人』で資料提供
地域と人権京都 552号（京都地域人権運動連合会刊，2009.7.1）
現段階の部落差別をみる「そもそも部落差別、部落問題とは」2 奥山峰夫
地域と人権京都 553号（京都地域人権運動連合会刊，2009.7.15）
現段階の部落差別をみる「そもそも部落差別、部落問題とは」3 奥山峰夫
ちくま 460（筑摩書房刊，2009.7）：100円
青春の光芒 異才・高橋貞樹の生涯 26 第7章『特殊部落一千年史』をめぐって 1 沖浦和光

2009.6)

各地域で奨学金返還に対する相談会を開催

月刊きょうの論談 77号(論談社刊, 2009.8): 500円
京都に生きて、京都を愛して 80 「差別と日本人」を考える 梶宏

グローブ 58(世界人権問題研究センター刊, 2009.7)

時代が抹殺したもの 中世と近世の断絶 下坂守

中国からの帰国者の子どもと在日のハルモニ 仲尾宏
移住女性の労働と結婚 アンペイドワークとアンダーペイドワーク 伊田久美子

藝能史研究 184(藝能史研究会刊, 2009.1): 1,800円

芸能史の書棚 宮尾與男編著『図説 江戸大道芸事典』
村上紀夫

こころ 6(野洲市人権情報センター編, 2009.8)

講演再録 認知症になっても障がいになっても大丈夫!
の地域づくり 溝口弘

こべる 196(こべる刊行会刊, 2009.7): 300円

ひろば122 ケニアのストリートチルドレンと過ごした日々
『チョコラ!』を語る 小林茂

四日市から18 躍動する女性たち 坂倉加代子

いのちを生きる21 『チョコラ!』を観る 長谷川洋子

映画の現場 写真と文 小林茂

こべる 197(こべる刊行会刊, 2009.8): 300円

ひろば123 父親との対話 バラク・オバマ『マイ・ドリーム』を読む 恩智理

播州からの便り2 この国には性暴力禁止法が必要だ 京都教育大学生による性暴力事件を糾す 福岡ともみ

いのちを生きる22 乾杯の夜 長谷川洋子

映画の現場 写真と文 小林茂

こべる 198(こべる刊行会刊, 2009.9): 300円

ひろば124 自由民権運動と町田 横浜開港百五十年に寄せて 工藤力男

尼崎だより31 犬や猫がケアの質を高める 中村大蔵

いのちを生きる23 ひとつの時代の終わり 長谷川洋子

映画の現場 写真と文 小林茂

こべる 199(こべる刊行会刊, 2009.10): 300円

ひろば 125 子どもの虐待をめぐる危うい言説 石元清英

四日市から 19 子どもと向き合う 坂倉加代子

いのちを生きる 24 ロスコの言葉 長谷川洋子

映画の現場 写真と文 小林茂

こりあんコミュニティ研究会通信 2号(こりあんコミュニティ研究会刊, 2009.8)

コラム 熊野川流域における在日の軌跡 2 水内俊雄

桜ノ宮龍王宮の報告 3 全泓堂

ロサンゼルスのコリアン・アメリカン 1 宮下良子

佐賀部落解放研究所紀要 26(佐賀部落解放研究所刊, 2009.3)

人権啓発映画と私 映像製作に携わって 大熊照夫

史料紹介 武内了温の歩み 1 白石正明

史料紹介 『口達録』3 中村久子

狭山差別裁判 410号(部落解放同盟中央狭山闘争本部刊, 2009.5): 300円

特集・足利事件

野間宏と関巡査部長問題 4 庭山英雄

BOOK 『ネイティブ・アメリカン』(鎌田遵著) 庭山英雄

試行社通信 273号(八木晃介刊, 2009.7)

同和地区問合わせ その後

京教大事件に思う

試行社通信 274号(八木晃介刊, 2009.8)

「だまし舟」の差別論

試行社通信 275号(八木晃介刊, 2009.9)

自作自演差別事件

資料館紀要 37号(京都府立総合資料館刊, 2009.3)

京都町奉行所関係資料集 一 京都東町奉行所御番方与力覚帳

人権21 調査と研究 201(おかやま人権研究センター刊, 2009.8): 650円

特集 認知症患者と人権

人権と部落問題 789(部落問題研究所刊, 2009.7): 630円

特集 マスメディアと人権

いま、メディアが果たすべき役割 桂敬一/人権とテレビ 岩崎貞明/マスコミの偏向報道を糾す取り組み 新井直樹/NHKをめぐる何が問題となっているのか? NHK問題京都連絡会の活動を中止に 湯山哲守/アイヌ民族を取材して 山田理恵

投稿 私小説『太郎が恋をする頃までには...』を読んで 菱崎博

文芸の散歩道 夏目漱石作『草枕』と戦争 水川隆夫

人権と部落問題 790(部落問題研究所刊, 2009.8): 630円

特集 平和に生きる

文芸の散歩道 真下信一著『君たちは人間だ』 人間として部落問題とどう向き合うかを示した親たちの姿 桑原律

人権と部落問題 791(部落問題研究所刊, 2009.9): 630円

特集 教職員の地位と人権

本棚 広川禎秀編『近代大阪の地域と社会変動』 大森実
人権と部落問題 792(部落問題研究所刊, 2009.9): 1,155円

特集 住民自治と同和行政の終結

資料 平成18年北海道アイヌ生活実態調査報告書(抄録)
2008年度部落問題研究所定期誌総目次

季刊人権問題 356(兵庫人権問題研究所刊, 2009.7): 735円

韓国系日本人として生きる道 在日韓国人に権利として日本国籍取得の保障を 内田将志

兵庫県における民主主義と人権に生涯を捧げた人々 小

京の有力地区の出現 藤沢靖介

解放新聞広島県版 1958号(解放新聞社広島支局刊, 2009.6.15)

解放理論を学び発展させるために 小森龍邦県連顧問に聞く 2

解放新聞広島県版 1959号(解放新聞社広島支局刊, 2009.6.25)

第61回県連大会 一般活動方針(案)

解放新聞広島県版 1960号(解放新聞社広島支局刊, 2009.7.5)

第61回県連大会一般運動方針(案)

解放新聞広島県版 1964号(解放新聞社広島支局刊, 2009.8.15)

解放理論を学び発展させるために 小森龍邦県連顧問に聞く 3

解放新聞広島県版 1965号(解放新聞社広島支局刊, 2009.8.25)

解放理論を学び発展させるために 小森龍邦県連顧問に聞く 4

解放新聞広島県版 1966号(解放新聞社広島支局刊, 2009.9.5)

解放理論を学び発展させるために 小森龍邦県連顧問に聞く 5

解放新聞広島県版 1967号(解放新聞社広島支局刊, 2009.9.15)

解放理論を学び発展させるために 小森龍邦県連顧問に聞く 6

解放新聞福岡県版 436号(解放新聞社福岡支局刊, 2009.7): 50円

「立花町連続差別八ガキ事件」について 第1次見解とお詫び 部落解放同盟福岡県連合会, 部落解放同盟筑後地区協議会

解放新聞三重版 280号(解放新聞社三重支局刊, 2009.6.30)

格差・貧困・失業の中で 糾弾闘争と行政闘争の結合の重要性 藤村進さんに聞く 2

架橋 21(鳥取市人権情報センター刊, 2009.9)

「男女共同参画社会基本法」誕生10周年!! ~ 私たちの社会環境と生活はどう変化したのか? ~ 林田迪子

ハンセン病問題 道半ばなれど着実な歩み 松下徳二

部落差別のいま 北口末広

障害者の人権確立に向けて 障害者の権利条約から見た日本の課題 東俊裕

架橋でめぐる全国の人権機関 総合博物館と人権 徳島県立博物館

語る・かたる・トーク 172(横浜国際人権センター刊, 2009.6): 500円

わたしと部落とハンセン病 43 動きだした福岡の同和教育運動 林力

信州の近世部落の人びと 49 一把稲と旦那場 21 斎藤洋

—

同和問題再考 102 空海よ、あなたまでもが... 上 田村正男

部落差別の現実 83 人権・同和教育の現場 7 人権教育と道徳教育は別科目 4 江嶋修作

語る・かたる・トーク 173(横浜国際人権センター刊, 2009.7): 500円

わたしと部落とハンセン病 44 とにかくムラへ行こう 林力

信州の近世部落の人びと 50 一把稲と旦那場 22 斎藤洋

—

同和問題再考 103 空海よ、あなたまでもが... 田村正男

部落差別の現実 84 人権・同和教育の現場 8 江嶋修作

語る・かたる・トーク 174(横浜国際人権センター刊, 2009.8): 500円

わたしと部落とハンセン病 45 「差別になっている」と言うこと 林力

信州の近世部落の人びと 51 一把稲と旦那場 23 旦那場の権利は、あちこちで質入れされていた 斎藤洋

同和問題再考 104 見えなかったか「差別戒名」 田村正男

部落差別の現実 85 人権・同和教育の現場 9 江嶋修作

カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センターたより 17(カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センター刊, 2009.7)

「部落差別」は人と人の関係性を照射してきたか 福岡ともみ

対話集会 「部落解放運動の提言」を読む

聖歌における見えない差別 太田勝

カトリック部落差別人権委員会ニュース 123(カトリック部落差別人権委員会刊, 2009.9)

山上卓樹・Sr.山上カクと武相のカトリック 石居人也

かわとはきもの 148(東京都立皮革技術センター台東支所刊, 2009.6)

靴の歴史散歩 93 稲川實

皮革の基礎知識 今井哲夫

皮革関連統計資料

かわとはきもの博物館めぐり 5 世界の太鼓資料館 太鼓館 福原一郎

季節よめぐれ 247号(京都解放教育研究会刊, 2009.7)

差別っていったいなんやねん? ~ もっとホンネで、主語は「わたし」で! ~ 川口泰司

季節よめぐれ 248号(京都解放教育研究会刊, 2009.9)

部落差別はなぜ今あるのか? 部落史がかわった Part2 上杉聡

教化研究 145・146号(真宗大谷派宗務所刊, 2009.6): 2,400円

特集 資料・真宗と国家 6上 1941 太平洋戦争期・前篇 京都市「同和」奨学金返還請求に反対する会ニュー

ス 1(京都市「同和」奨学金返還請求に反対する会刊,

今週の1冊 『官製貧困社会』（布施哲也著）

解放新聞 2428号（解放新聞社刊，2009.7.20）：80円

今週の1冊 『今こそ平和憲法を守れ』（中北龍太郎著）

解放新聞 2429号（解放新聞社刊，2009.7.27）：80円

山口公博が読む今月の本

『琵琶法師 <異界>を語る人びと』（兵藤裕己著）/

『ダブリンの市民』（ジョイス作）/ 『昭和こども図鑑

20年代、30年代、40年代の昭和こども誌』（奥成達著）

解放新聞 2430号（解放新聞社刊，2009.8.3）：120円

「立花町連続差別八ガキ事件犯人逮捕」について 第1次
見解とお詫び 部落解放同盟福岡県連合会，部落解放同
盟筑後地区協議会

今週の1冊 『私たちの戦争責任』（瀧澤厚著）

解放新聞 2431号（解放新聞社刊，2009.8.10）：80円

解放の文学 40 核のない地球は幻か 原民喜と「心願の

国」 音谷健郎

今週の1冊 『八〇万本の木を植えた話』（イ・ミエ著）

解放新聞 2432号（解放新聞社刊，2009.8.17）：80円

ぶらくを読む 45 ひろたまさきの「社会的差別は近代に

作られた」論 湧水野亮輔

解放新聞 2434号（解放新聞社刊，2009.9.7）：120円

ぶらくを読む 46 部落史研究の現況はどうなっているか

湧水野亮輔

解放新聞 2435号（解放新聞社刊，2009.9.14）：80円

解放の文学 41 村上春樹と『1Q84』 音谷健郎

解放新聞 2436号（解放新聞社刊，2009.9.21）：80円

山口公博が読む今月の本

『夢を食いつづけた男』（植木等著）/ 『ノーザンライ

ツ』（星野道夫著）/ 『からだが変わる体幹ウォーキン

グ』（金哲彦著）

今週の1冊 『教師花伝書～専門家として成長するために

～』（佐藤学著）

解放新聞 2437号（解放新聞社刊，2009.9.28）：80円

今週の1冊 『生物多様性と食・農』（天笠啓祐著）

解放新聞 578号（岡山解放新聞社刊，2009.8.25）

書評 野中広務・辛淑玉『差別と日本人』

解放新聞大阪版 1784号（解放新聞社大阪支局刊，200

9.6.22）：70円

大阪の部落史を歩く 2 江戸中期の浪速地区 七瀬新地に

広がる皮革団地のびしょうじ

解放新聞大阪版 1786号（解放新聞社大阪支局刊，200

9.7.13）：70円

大阪の部落女性実態調査 1

解放新聞大阪版 1787号（解放新聞社大阪支局刊，200

9.7.20）：70円

大阪の部落女性実態調査 2 第3章「教育・識字・情報」

のまとめ

解放新聞大阪版 1788号（解放新聞社大阪支局刊，200

9.7.27）：70円

大阪の部落女性実態調査 3 第4章「福祉・健康」のまと

め

大阪の部落史を歩く 3 部落に生まれた大富豪 河内屋藤
兵衛 幕末の更池村 のびしょうじ

解放新聞大阪版 1789号（解放新聞社大阪支局刊，200

9.8.3）：70円

大阪の部落女性実態調査 4

解放新聞大阪版 1790号（解放新聞社大阪支局刊，200

9.8.10）：70円

大阪の部落女性実態調査 5

解放新聞大阪版 1792号（解放新聞社大阪支局刊，200

9.8.24）：70円

大阪の部落女性実態調査（終）差別撤廃の糧として活

用を

解放新聞大阪版 1793号（解放新聞社大阪支局刊，200

9.9.7）：70円

大阪の部落史を歩く 4 歴史的記憶から消された堺 塩穴

の強制移転 のびしょうじ

解放新聞改進黨 387号（部落解放同盟改進黨支部刊，20

09.6）

京都市同和行政終結後の行政の在り方総点検委員会 傍

聴を終えて 下

解放新聞京都版 824号（解放新聞社京都支局刊，2009.

6.20）：70円

加害の歴史を訴え20年 丹波マンガン記念館が閉館

解放新聞京都版 830号（解放新聞社京都支局刊，2009.

8.20）：70円

書評 『差別と日本人』（野中広務，辛淑玉著） もりま

や

解放新聞京都市版 213号（部落解放同盟京都市協議会

刊，2009.7）：150円

錦林のまちづくり運動とコミュニティセンターのあり方

解放新聞京都市版 214号（部落解放同盟京都市協議会

刊，2009.8）：150円

『京都市同和行政終結後の行政の在り方総点検委員会報

告書』に対する見解

解放新聞東京版 719号（解放新聞社東京支局刊，2009.

7.1）：90円

東京を中心とする部落・差別の歴史 2 いつから部落差

別が 藤沢靖介

解放新聞東京版 720号（解放新聞社東京支局刊，2009.

7.15）：90円

東京を中心とする 部落・差別の歴史 3 中世、河原者・

キヨメの登場 藤沢靖介

解放新聞東京版 722号（解放新聞社東京支局刊，2009.

8.15）：90円

東京を中心とする 部落・差別の歴史 4 東日本におけ

る「賤民」の出現 藤沢靖介

解放新聞東京版 723号（解放新聞社東京支局刊，2009.

9.1）：90円

東京を中心とする 部落・差別の歴史 5 弾左衛門と東

収集逐次刊行物目次 (2009年7月～9月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

- 朝田教育財団だより 11 (朝田教育財団刊, 2009.7)
「京都市同和行政終結後の行政の在り方総点検委員会」
の活動の差別性に関する考察 井本武美
あすばる 20 (甲賀・湖南人権センター刊, 2009.6)
対談記録 「わたしたちが歩んできた道 そして これから」
溝口弘さん, 佐々木理信さん
IMADR-JC通信 159 (反差別国際運動日本委員会刊, 2009.8): 750円
特集 女性差別撤廃委員会第6回日本報告書審査とマイノリティ女性
ウィングスきょうと 93号 (京都市女性協会刊, 2009.8)
図書情報室新刊案内
『女性校長のキャリア形成 公立小・中学校校長554人の声を聞く』(女子教育問題研究会編)/『猿橋勝子という生き方』(米沢富美子著)
解放教育 500 (解放教育研究所編, 2009.7): 770円
特集 小学校「外国語(英語)活動」のこれから
映画をみる、映画でみる 第4回「『沈黙を破る』、その鏡に私たちは何をみるのか」中村一成
解放教育 501 (解放教育研究所編, 2009.8): 770円
特集 世界が広がる暑い夏 「夏休み」の過ごし方
解放教育 502 (解放教育研究所編, 2009.9): 770円
特集 子どもと読書
解放教育 503 (解放教育研究所編, 2009.10): 770円
特集 キャリア教育と人権総合学習
解放研究しが 19号 (反差別国際連帯解放研究所しが刊, 2009.5): 1,000円
親の戸惑い/子の戸惑い 特措法後の教育的課題 三浦耕吉郎
指 山村勉
やさしいことばで、あたたかいことばで 美濃部薫
明治前期における三雲村の識字状況 橋脇を中心に 芝原雅敏
解放新聞 2424号 (解放新聞社刊, 2009.6.22): 80円
山口公博が読む今月の本
『納棺夫日記 増補改訂版』(青木新門著)/『闇こそ皆 上野英信の軌跡』(川原一之著)/『日本の名随筆村』(立松和平編)
改悪入管法を読む 2 在日の願い裏切る新居住地支配 下佐藤文明
ムラの四季 部落解放運動とカトリックを研究 石居人哉さん
今週の1冊 『強いられる死 自殺者三万人超の実相』(斎藤貴男著)
解放新聞 2425号 (解放新聞社刊, 2009.6.29): 80円
改悪入管法を読む 3 最終目標は日本人のカード常時携帯 上佐藤文明
今週の1冊 『イスラエル』(臼杵陽著)
解放新聞 2426号 (解放新聞社刊, 2009.7.6): 120円
多様な教育を求めて 不登校から学ぶ わたしたちのめざすもの 奥地圭子
改悪入管法を読む 3 最終目標は日本人のカード常時携帯 下佐藤文明
今週の1冊 『いま、逆攻のとき 使い捨て社会を越える』(鎌田慧著)
ぶらくを読む 44 この社会を覆っている部落差別の闇に迷い込む グリコ・森永事件の深層 湧水野亮輔
やみ夜の森 3 絵と文 山戸寛
解放新聞 2427号 (解放新聞社刊, 2009.7.13): 80円
解放の文学 39 特攻死の意味をみつめる 吉田満と『戦艦大和の最期』 音谷健郎
改悪入管法を読む 終 衆院通過の意味と反撃の可能性 佐藤文明

事務局よりお知らせ

2009年度部落史連続講座PART2を次のとおり開催します。11月6日(金)に本郷浩二さん「武内了温の部落問題論 真宗大谷派における融和運動の軌跡」、11月20日(金)には石元清英さん「部落=窮乏説」と一面的な部落観 部落問題学習の課題について考える」、12月11日(金)には白石正明さん「河原町天主堂と京都・女子和洋技芸学校 仏人プロス・メリーが遺したもの」です。各回とも時間は午後6時半から8時半、場所は京都府部落解放センター2階実習室です。詳しくは下記のホームページをごらんいただくか、電話でお問い合わせください。

所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター 3階

TEL/FAX 075-415-1032

URL <http://www.asahi-net.or.jp/~qm8m-ndmt/>

開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 10時～17時(祝日・年末年始は休みます)

交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約10分)下車 北へ徒歩2分